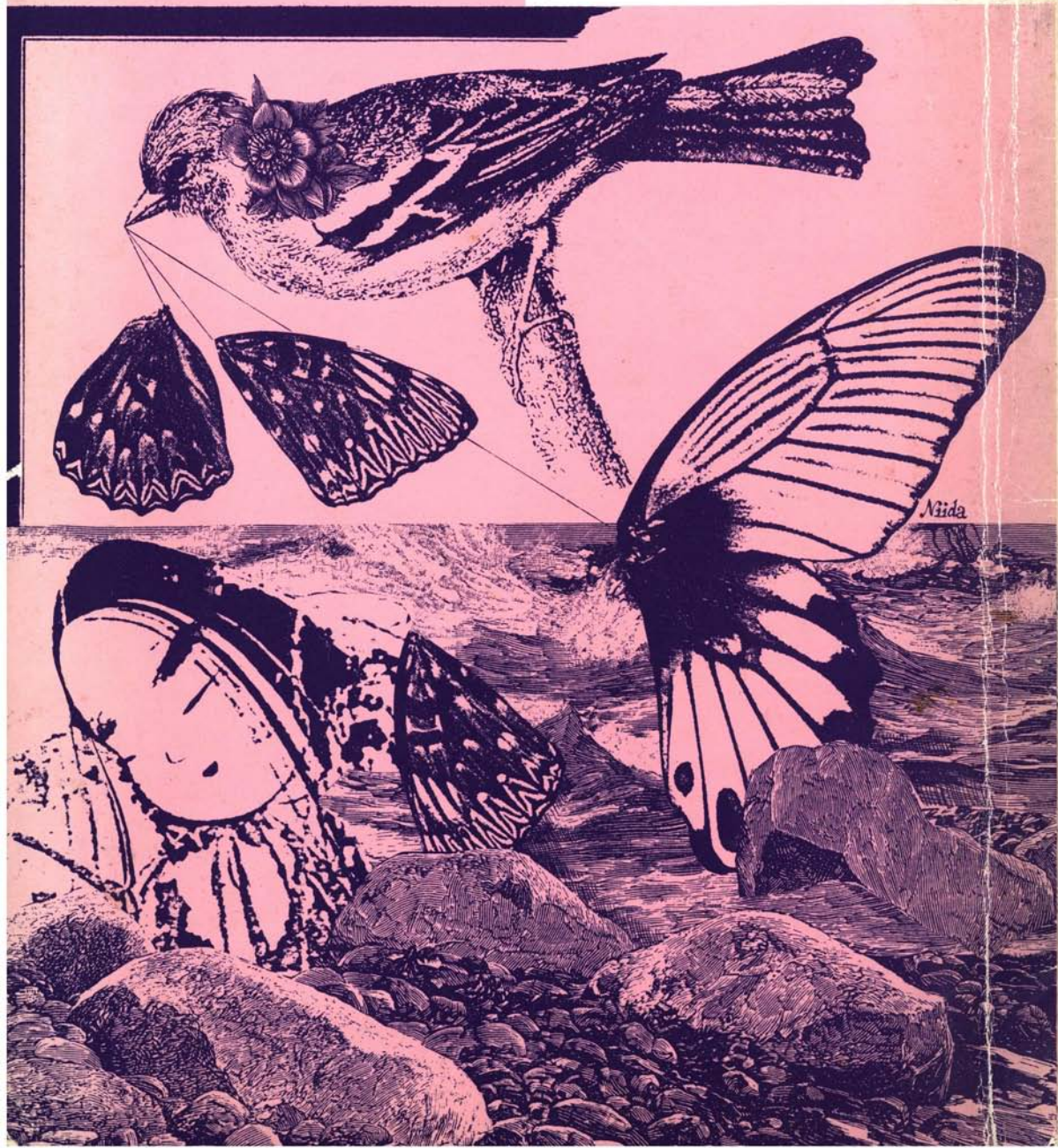


わいふ

140

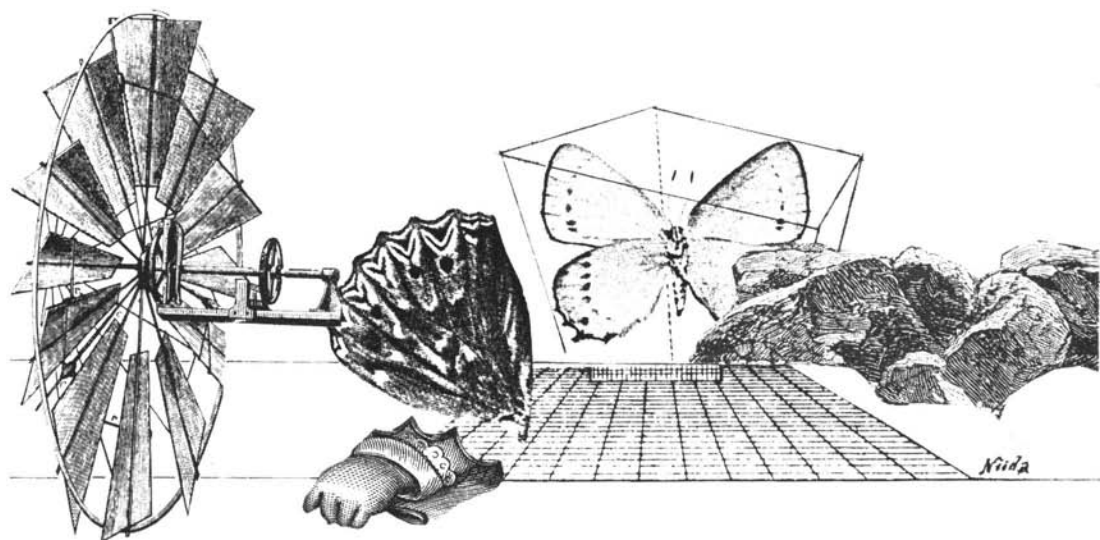
特集
家事を洗いなす



考える

主婦のための雑誌 — わいふ

書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは 発見するでしょう
同じことを
考えているひとが
あそこにも ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは もう
一人ぼっちではない
ということ



特集・家事を洗い直す

特集投稿・わたしにとって家事とは何か……………5

渡辺精一・中野桂子・安達日南子・中西淳子・西本慶子
馬場淑子・喜多和子・小河原三枝子・徳光利子・山本健二

家事をどうとらえるか＝武田京子……………16

－好ききらいだけで家事を語るのは間違いだ－

未来の家事＝田中昭二……………20

－コンピューターが家庭をかえる－

座談会・家事のねうち……………24

樋口恵子・能勢智子・平岡ふき子・林世志江・滝沢洋子

インタビュー・法律から見た家事＝中島通子……………32

－家事をおろそかにする妻は離婚される？－

ルポ・おかず材料配達会社＝和田好子……………35

－家事の社会化の方向をさぐる－

内助の夫－その三－風間文雄さん……………4

入場者16,000人 欠陥食品展＝寺田かつ子……………37

食品情報……………40

投稿随筆・たていとよこいと……………41

留守宅料理・主婦が夕食に帰れない時のために……………45

おしゃべり・声のひろば……………48

お知らせ……………44



ここにもいた

すばらしい夫族

風間文雄さん



風間さんの結婚生活を、シベリアで送った四年間の捕虜生活を抜きにして、語るのは難しい。

日本の家庭には珍しい、妻と、夫との相互尊重にもとずく暮らしが、山に囲まれた甲府の、あたり一面のたんぼの中に建つ、風間さん夫妻の家の中で営まれている。

零下四〇度のシベリアでの越冬。バラ線で囲んだだけの露天が「収容所」であった。山腹に、自分たちの寝る洞穴を掘る仕事から、捕虜生活ははじまった。

立っては歩けない千人入りの洞穴に、鰯のかんづめのように薙きあって横になると、もう外に出ることもできなかった。

ヒエと、黒パンで、伐採作業にかりたてられた。

一年で、二百人が死んだ。

二年目、中小都市での労働者住宅の建設にまわされた。

ロシア人は人なつこい。男女の労働者にまじって同じように働くうち、いつか日常会話には不自由しなくなっていた。

二十五才からの四年間、労働しながら、ロシア人の家庭生活に触れたことが、風間さんの結婚観に、どれほど大きな影響を与えていることか。

男にまじって、労働の現場で働くロシア女の逞しさ。女は弱いもの、という日本の常識は、手もなく打ちやぶられた。

将校の妻もあれば、その配偶者で一兵卒の夫もいる。何のこだわりもなく、暮らしている。

逆に、外では地位のある男も、家に戻れば、水道のない三階の住居に、水を汲みあげる労

働から何から、やってのける。

すべてが、驚きだった。

いいな、と痛切に思った。

はじめは苦手だったすっぱいライ麦の黒パンと、牛乳と、塩漬けの生魚の食事に、すっかりなじんでしまったように、ロシアの夫婦の姿は、風間さんの意識の底に、こびりついてしまったのである。

風間さんのお父さんは、二度結婚している。はじめの妻は、十一人の子ども。二度目の妻は、八人の子どもを生んだ。

風間さんは、二度目の妻の長男である。十一人の兄妹にかこまれた少年時代について、風間さんは多くを語らない。

二十も年下の若い妻を持ちながら、風間さんの父上は、昔ながらのワンマン亭主だった。女にかけても、自由気儘にふるまった。

苦勞を重ねる母の姿に、風間さんの胸には、絶対に、オヤジのような家庭はつくるまいという決意が育っていった。

その決意の上に、ロシアの家庭像が、接木されたのである。

二十四年、やっと帰国して、引揚者仲間と改造した進駐軍の衣料を、露天で商っていたころ、ゆりさんと知りあった。

穴のあいたスック靴をはいて、長い道のり

を歩いてデパートにやってきたゆりさんが、その穴から埃をはたきおとしている姿が、たまらなくいじらしく思えたのが愛のはじまりだったと云う。

結婚の翌年、農協の仕事をする事になり、三十八年からは、甲府から六十軒ほど離れた富士山ろくの開拓地の農協に移っている。

週末に家に帰るだけの別居生活を余儀なくされたことが、風間さん夫妻のあいだに、いつまでも新婚当時のようなみずみずしさが流れている一つの理由にもなっているようだ。もっとも一人息子の寿史（としふみ）さんが高校に入学してから、いままでよりも、オヤジを必要とする年頃になったのだから、と、週末だけでなく、週の半ばにも一回、風間さんは愛車を駆って我が家に帰ってくる。

ところで妻のゆりさんは、いわゆる「奥」さんではない。寿史君が三才のころから、山梨大学で幼児心理の聴講生として四年間勉強をつづけ、県ではじめて、重症心身障害児を守る会を創立し、まったく顧みられなかった障害児問題に光を投げかけ、自身障害児のヘルパーとして、県境の僻地にまで出かけては、ヘルパーとしての奉仕をつづけてきたひとである。その他読書会のリーダー、PTAの副会長、県のP連の副会長などと、活動の歴史は数え切れない。

せっかく帰ってきたその日曜に、ゆりさんが外出したりする羽目になると、やはり腹が立ちましたね、と風間さんは云う。けれど、社会的に活動することが好きな人を、家に閉じこめておくなどということができる筈がない。第一、妻はバカでは困る。農家の妻にくらべても、社会で直接働くことのないサラリーマンの妻は、とかく鈍化が激しいのが残念だ、という言葉がつづくのである。

四十年、労働省の婦人少年局が公募した論文に、ゆりさんの論文が入選して泊りがけで全国会議に出席する話がでたとき、子どもさえ納得すれば、いくらでも行っておいで、と気持よくOKした風間さんの言葉は、迷っていたゆりさんをどれほど力づけたかわからない。

いまでも、ゆりさんの外出に、駅までの送り迎えを、風間さんはいやな顔一つせずに行っている。帰ってみれば、洗濯も、掃除もやっていてくれることがあって……とゆりさんはすまながるのである。

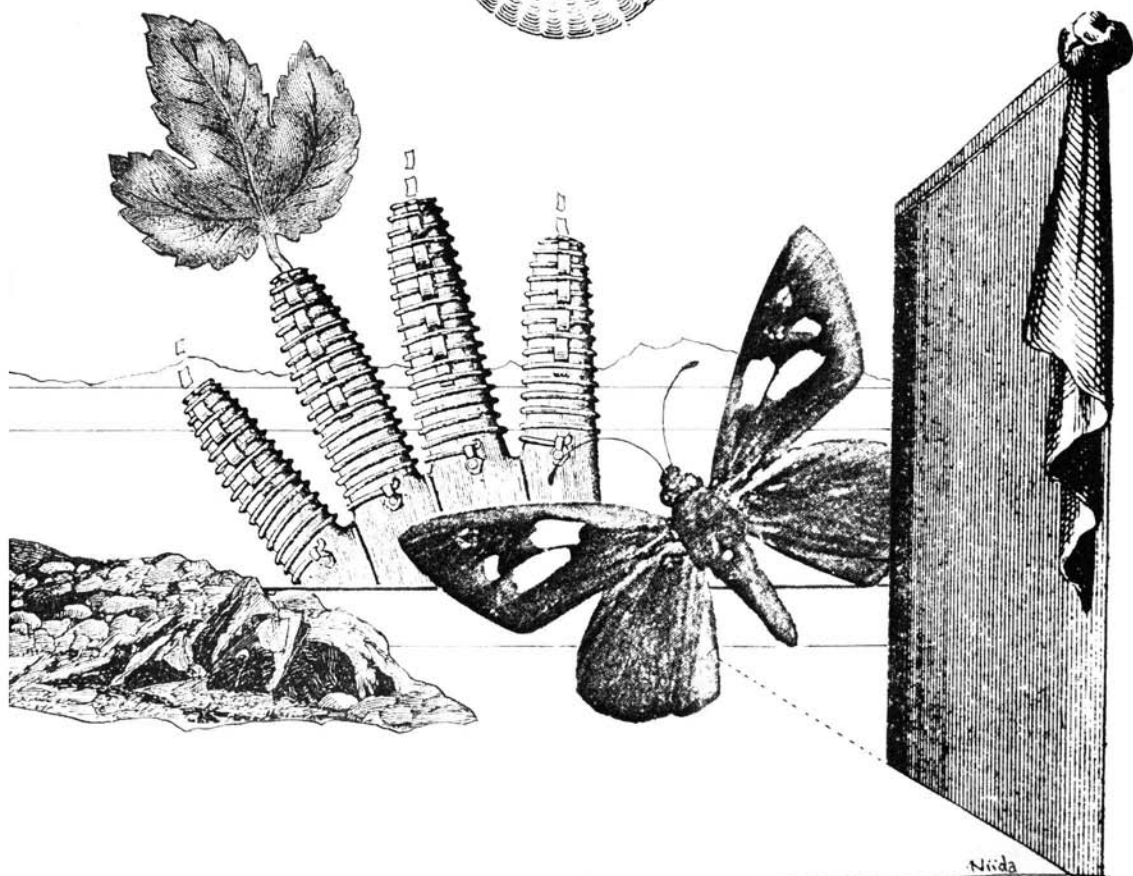
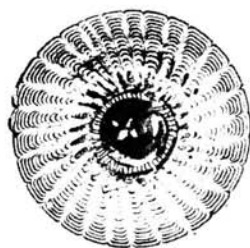
風間さんは、妻を「ゆり子」と呼ぶ。会話のなかでは「あなた」という二人称を使っている。都会の新婚家庭でも、それほど多くは聞かれないこの言葉が、何の不自然もなくひびくやさしさと、相互尊重の念が、銀婚式を迎えるこの二人の間には流れている。(田中)

特集

家事を洗い直す

誰もするひとがないから
おいしいものが食べたいから
ごみの中では暮せないから
家族が飢えては困るから……
あなたも わたしも家事をする

きれいだろうが 好きだろうが
得手だろうが 不得手だろうが
海女だろうが 学者だろうが
農婦だろうが 事務員だろうが
女なら だれでも 家事をする
それはなぜ？
家事とはいったい 何だろう



家事と主婦と「わいふ」

東京都

渡辺精一

三年ほど前のことになろうか。私の小学校時代のクラスメート五名が、奥さん同伴で正月の交歓会を催したことがある。話がたまたま家庭における夫と妻の役割に及んだとき、私はこういったものである。「夫の稼ぎの多分半分は、妻が家事を整えてくれることに負っていると考えるべきだろう」と。とたんに、予期しなかった反応が一斉に起こった。夫どもは「俺の稼ぎは俺の力によるもの。妻の世話になどなっていない」と異口同音に叫ぶ。細君たちは「私はそのようにうぬばれてはいません。男の方達がそう思ってくたされば嬉しいのはたしかですけれど」と口を揃える。遠慮のいらぬ仲であつたればこそ、齒に衣をきせぬ反論があいついたのではあるけれど、その勢いの余りの強さに、私はしばしじろいだことであつた。憲法はたしか、夫婦の平等をうたつていたと思う。私の見るところでは、そこには少なくとも二つの含意がある。一つは、夫婦は互いに人間として平等だ、ということである。夫婦が互いに相手を尊重しあふことだ、といい換えてもよい。それゆえ一方が他方を無視ないし軽視したり、あるいは一方が自分を卑下したりするところには、平等を期待することはできない。右のエピソードの夫たちと細君たちの言葉からは、だから平等を看取することができないのである。日本では、相手を無視ないし軽視するのは夫であり、自分を卑下するのは妻である、という例が多いようだ。そうした態度をとるべきではないという自覚が双方に望まれることになるのだろうか、自覚をし、かつそれを行動のうえに反映させるといふことは、実はいふほど易いことではない。もしも連帯のきずなで結ばれた外部から

の示唆が期待できるなら、それが重要な契機になりうることはたしかであつて、そういう意味では世の細君たちとの関係において「わいふ」のもつ存在意義は、まさにもなく高いといわなければならぬだろう。ところがその「わいふ」にしてさへが、「妻を」対等な一個の人間として扱つてほしい（一九三九号二五頁）と夫に願うような、卑下しているといわれないまでも、少なくとも初めから自分を受け身に置いていたといいたくなるような構えから、なかなか脱却しきれないでいる。ことによると、それというものにも事情があるのかもしれない。恐らくは努力を重ねながらも、時には日本の妻をめぐる歴史の重みが足かせとなり、時には「見ざる聞かざる云々る族の夫」（同一八頁）が行手に立ちはたかのである。だが、もしもそうだとするなら、それを超えようとする努力が余つて夫の非をなじる結果を招く危険に、改めて目を向ける必要がある。そういえば「わいふ」にその傾きが皆無であるともいえないのであつて、たとえば「家事万端を整えるのはお前の役目、と押しつけてくる夫は、どんな両親に育てられたのでしょうか。これはど露骨な男尊女卑の横行は、日本独特のものかもしれません」（同二〇頁）といった口吻などにその危懼をかいま見る。互いに人間として尊重しあふといふことは、ほんとうにむずかしいことのようにだ。

ところで、憲法にいう夫婦の平等がもつもう一つの含意は、夫婦は互いに分業関係に立つ、ということである。日本の場合、その分業関係とは、仕事は夫、家事は妻という割り切った関係をとっている例が、実際に極めて多い。正月の交歓会に出席した私のクラスメートの場合は、全員がその関係を細君との間にもつていた。そうした関係にある夫婦ならば、ということと述べたのが前記の私の発言にはかならず、そこに盛られた考え方は憲法精神に合致すると、私はいまでもそう思っている。

いうまでもなく、夫婦が互いに分業関係に立つとは、仕事は夫、

家事は妻という関係に割り切らねばならぬというのではない。ひとくちに夫婦とはいっても、互いに価値観・性格・年令・健康その他の点において違いがある。しかもある夫婦と他の夫婦との間にも、経済・社会・地域・住宅立地その他の環境的諸条件に違いがある。それぞれの一对の夫婦における分業関係とは、こうした諸条件が総合化され、そのうえに立って組み立てられるべきものである。それゆえ分業関係は、夫婦によっては、右のような割り切った関係から入りくんだ関係まで、種々の形態をとる。しかも一对の夫婦の間においてさえ、その関係は、条件の変動に応じて必ずしも固定的でない。

重要なことは、分業関係が相互尊重のうえに立って組み立てられるのが望ましいということである。憲法がいう夫婦の平等がもつ二つの含意は、こうした意味で統合化されねばならない。さきに述べたように相互尊重の確立がむずかしいだけに、望ましい分業関係の組み立てもまた容易ではないだろう。結局は夫と妻との間の研鑽に待つほかはないのではあるまいか。いずれにしても、相互尊重がどの程度確立されているかは、最終的には当該夫婦の内面の問題に帰する。それゆえ特定の夫婦の分業関係の現状を第三者が批判したり賞讃したりするのは、おのずと一定の限界が伴うのは避けられないだろう。夫婦とは、囲いの内では弱く、外に対しては強い、そんなものではないのだろうか。

「家事を洗い直す」ということについて

大津市

中野桂子

「家事」についてうんぬんされねばならない理由は何なのか。かなければこそかくあるべきだ——に、一から取組んで実行すること

は、次の世代に生きるふたりの娘のために、見送ることにする。老化解現象がはじまって、体力的にも可能性が狭まってきた立場で原点に立ちかえることは、時すでにおそしと思うから。

そこで自分は、どのように「家事」ととり組んできたか、いるのか、この機会に分析してみようと思う。

夫婦のみの生活から、長女の誕生と同時に姑もともにという生活に一挙に転じた時、家の外に仕事をもっている私は「家事」に忙殺されそうになった。帰宅後の時間は「眠っている時間」だけが自分の時間であった。結婚後六年、三十一才で母になったときているから、怠惰に馴れ切っていたところに一ぺんにバチが当たったのかも知れない。いつも目の前に「今しなければならぬこと」が山積して、ヤレヤレと思っていたのだが、そんなある日上司から「あなたの企画はいつもおもしろいけれど、一体どんな時に発想が浮ぶのですか? 家庭でもいそがしいらしいのに。」と問われた。そういわれてはじめて、私はその問いを自分に向けてみた。そして自分自身の行動を観察してみた。

洗濯機の回転のリズム、炊事の手動き、掃除の時の身体の動き、それらの流れのある瞬間、いわゆる「仕事のための発想」なるものが生れることをキャッチした。家事をするなかに、仕事の意識がひそんでいることを知った。その頃から私の「家事」に取組む意識は二重構造になり、それが習慣化して行ったと思う。やむを得ず「ながら族」になったのだ。

そして、七年後に生れた次女が三才になった頃「家事」に対処するエネルギーと時間が惜しいということと、ふたりの娘にこんな母親の後姿を見ていることは間違いだと思い到り、「家庭」の中ではまず自分のやりたいことを優先することに決めた。「やらねばならぬ家事」は一定量あり(いくら合理化されても)、二重の意識でそれを処理していくことに変りはないが、例えば洗濯機を使いなが

ら平行して読書する時、何を優先するかという構えをはっきりすることにした。機械が次の動作を要求していても、書物の区切まで読んで了うということだ。掃除は「健康体操」のつもりでやり、疲れるまでにやめること等、つまり「家事」にのまれず、「家事」をのんでしまうことも知れない。

そして家事の役割分担については、可能な限り私ひとりで行っている（姑は病弱）。マイペースでなくともまいかないし、特にふたりの娘に、女だから——と役割分担することはもうひとつ気にならない。（いつも手伝えといわないので、却って頼んだ時は何でもすぐやってくれる）

昨年初、突然病に臥れ、二ヶ月間家を離れた時、私は「家事」について殆ど心配しなかった。今までやっていた私が居なくても「やらなければならぬこと」だから、みんな何とかなるだろうと思っていた。その間省略可能な限り「家事」は省略された筈だったが、特別家がきたなくなったことも、夫や娘たちがきたなくなった（中三・小二）こともなかったし、誰も栄養不足になんかになっていない。それよりも、夫や子供が精神的に参るの方が気になった。そしてそうであったことが後でよくわかった。「家事を洗い直す」、それは取組みの問題であると思う。

私は「職場（職階は主査）と家庭」とは両立させねばならないと考えているが、そのなかで「家庭」を考えると「家事」よりも、「教育」を優先させる。因みに娘ふたりが「本ずき」で、私よりうまい文章をかくのは、私の読書の後姿から学んだものが自然に身についたものと考えている。「家庭教育は、両親の生きる姿勢が基礎になる」と、何度も教えられたから。「家事」はあくまでも二義的なものだと思っている。私は「女とは悲しきものよ」の意識をふたりの娘に与えたくない。私の後姿から「考え」て、「家事を洗い直す」のは、彼女たちであると思っている。

家事は家族みんなの仕事

松江市

安達日南子

家事とは読んで字の如く家庭の仕事、家庭にまつわる仕事という意味です。という事は家事とは当然、その家庭を構成している人間全体が関わらねばならない仕事という事になります。家族の一員であれば何らかの形で家事に従事しなければならないということです。私の場合、家事とは全くその通りだと思っていますので、私は私の家庭において、家族の一員として私の分だけ家事を分担しています。具体的に言えば、私の分担は食事に關するものです。そして夫の分担は掃除、洗濯、風呂、修理関係、家の外回りの少々力のある仕事などになります。（勿論、時間のやりくり上、その役割を適宜交代することはあります。）

ところで私の家の家族構成は私、夫、長女（もうすぐ四才）、長男（二カ月）の四人です。前に家事とは家族全員が関わらなければならぬ仕事と書きましたが、いくら何でも二カ月の長男はベビーベッドで寝たきりということになりますので、残る一人の家族長女の役割ですが、彼女は父親、母親の仕事のなかで自分の可能な範囲において手伝うという形になります。彼女が最初に手伝うようになったのは二才ぐらいの時です。そしていずれ長男も二才ぐらいになれば彼女のようにやらせるつもりでいます。

ちょっと余談になるかもしれませんが、私は家族の一員であれば、自分の能力に合った家事を分担するのは極めて当然なことであるという事を、子供には第一義的に知ってもらいたいと思っています。ただし、男の子でも女の子でも学校に行くようになって、勉強を口実に家の手伝いをさぼりたがるような子供にだけはなってもらいたく

ないというのが私の強い願いなのです。

さて以上のように家庭内においては一応全員が各自の持場を持っているわけですが、それでは家庭外での役割(わかりやすくいえば家族の口を養う稼ぎの方)は?という事になるかもしれません。男でも女でも大人になれば働くのは当然だというのが私の絶対に譲れない信念ですので、従って我が家の大人は二人、つまり稼ぎ手も二人ということになります。

また話が横道にそれますが、働くということは、つまり自分の身が自分で養えるということです。それ以上でもそれ以下でも断固ありません。大人は働かなければならないという信念を私なりに理由づけますと、第一に、働くことによって人間の肉体的、精神的健康が保たれるということ、第二に、労働は人生における最も具体的な生きがいになり得るということ、第三に、健康な人間が頼いに汗せずして何の大人ぞ、と私には思われるということなどです。共働きで子供がおれば、おきまりの保育問題が起きます。現在私も子供を預けて働いていますが、大人なら働くのが当然だということをいささかもひげ目を感じることなく子供に納得させているつもりです。

男から仕事を取り上げたら彼らは退屈して一週間もすれば音をあげるでしょう。私の夫もその例外ではありませんし、私も働くこと

★イラスト、マンガ、カットなど描いて下さるかたは
いらっしゃいませんか?

いつもなんとなく編集に追われ、下手の横好きの絵は
締切り間際の夜中にモウロウとして描いています。

引き受けてもよい、とお思いかた、声をかけて下さ
いませんか? 見本として作品を二、三点、送っていた
だけは幸いです。

(編集部 林)

が好きなのです。ということ、我が家は二人とも働いていますので、当然家事も二人で協力し合うという形になります。私は夫が家事をするのは当然だと思っていますので、彼に対して別に気がねも遠慮も感じませんし、夫も自分が家事をするのは当然だと思っているのか、そのことについては別に口にも出しません。かくして我が家では家事は誰がしてもいいもの——二人とも少々怠け気味の時は——誰もがしなくちゃならないものという程度のものであり、生活していく上で、とりたてて問題となるほどのものでもないというところ です。

もっとも今年度は、夫に学資を出してもらいながら再び大学に聴講生で通い始めましたので、家事の分担も少々変わり、私の方には余計に負担がかかるようになっていくんじゃないかなどと考えたりしています。

よりよく生きるために

名古屋市

中西淳子

結婚するまでは家事に全く無関心だった私も、結婚してからは厭でも毎日やらなければならなくなり。はじめの二、三年はすいぶん苦痛に思いました。

同じことのくり返し、誰にでもできる仕事に追われる毎日にあせりを感じたり、精一杯努力したところで、それに対しての評価や報酬がまるでなく、適当に怠けることもできるかわり、やり出したらしりのない家事という仕事に不満を抱きながら、仕方なくやっていました。

でも家にいる限りはどうしてもやらなければならないことなので、すから、自分なりにその価値を見出し、気持ちよくやらなければと思



漆芸

二〇号

東京都

野口喜子

って、婦人雑誌や新聞の家庭欄などを読み、プロの主婦をめざしてとか、家事もやり方次第で創造的・芸術的仕事になると、気分を上げた考えをもって家事に励みました。

掃除にしても、洗濯にしても、炊事にしても、プロの意識をもって徹底的にやってみようとか、部屋の装飾、洗濯のやり方、料理の味つけや盛りつけなどにも独自の味を出そうという工夫してみたり、今日は料理、次は編物、そのまた次は洋裁と園芸という具合にまどをしばって、とかく散漫になりがちな家事を系統だてて積み重ねて行く努力も致しました。

その結果、苦痛だった家事も手際よくやれるようになり、家事は日々を快適に送る手だてとして、決しておろそかにできない、心をこめてやるだけの価値ある仕事だと思えるようになりました。

居心地の良い部屋、さっぱりした衣服、美味しい食事は人の心を和やかにし、生きている喜びをも与えてくれます。

そしてまた、生まれてきた子供を育てるためにも家事は欠かせない仕事だと思います。

より良く生きるための、より良く育てるための掃除であり、洗濯であり、炊事であると思ひ出しましたら、毎日の家事にもあらたな張り合いが生まれてきました。しかし、家庭という狭い枠の中で、家事と育児だけに専念しては、より良く生きる手だても、より良く育てる手だても限られてしまいます。

広い視野にたっちはじめて家事の果す役割がはっきり致しましたが、これから先も家事をはじめとして、より良く生きるための努力を惜しまないつもりでおります。

最後に、私がこのように家事を云々できるのも、経済的安定と家族の健康があるからで、そうでない場合をも考えて、家事の社会的・経済的評価を含めた、家庭における女性の諸問題に関しては、これから少しずつ考えてゆかなければならないと思っております。

家事——この愛おしきもの

八尾市

西本慶子

家事というきりがない煩雑な仕事、そして多くの場合それは「女の仕事」とされている。

現在のわが家では家事一切は私の役目、他のものは指一本ふれない。そして、私はそれを誇りとしている。

私は娘時代から結婚生活二十年余りの現在まで、殆どを教職という職業の中で過し、家事から解放されていた時期の方が長かったのであるが、今は全く家事専業の主婦である。

いま、この課題を前にして、改めて目をこらしてこの仕事を見つめてみる。そして、その愛おしさに心がふるえるのである。それは、私が長く外に出て職業についていた女であるからだろうが、このこまごまとした仕事のひとつひとつが面白く楽しく、自分のペースで進められる自由さがたまらない。

職業というものは、その大きな力でひとりの人間を制約する。時間、自由、そして人間性まで。それに見返るだけの収入はあるとしても、ときにはその重みは、すべてを押し潰そうとする。家事労働にはそれはどきどきしい制約はない。あるとすれば自分自身で定めた一日の動き方のみである。家族が少なければ少いだけ、自由の巾がひろい。よく近所の奥様が少しの時間を利用してパートにいく姿を見送るが、職業婦人という場にあった私は、その時間と収入とに代えられる無駄の大きさを囁きたくなるのである。

私は決して明治の女のような確固とした家事の信念や能力をもっているわけではない。私の母が、職業をもちながら、家庭の中で動きまわっていた姿や言動をおもうとき、到底、足元にも寄せぬこと

を知っている。徹底した儉約や家事処理の能力は、いまおもい出すと、もはや現在では存在し得ぬ、明治という幻であったのだと思う。しかし、昭和の主婦である私は、私なりに家事を営んでいて、それでいいのではないかと勝手な理窟をひっぱり出す。人生は定められた歳月しかない。死は最も正確に訪れ、人生の終りは来る。それならばそのときまで本当に自分の生を楽しめば嘘である。主婦業といわれるこの家事専業者であっても、この仕事を愛し楽しみ悔いのない日々をすごしたいものである。

お天気のよい日はベランダ一ぱいに夜具を干そう。夜のねむりの安らかさ pensando、にんまりしながら。洗濯機の調子もよい。よく働く奴などとはめてやろう。ゴロゴロと私の後をついてくる太っちょの掃除機も、もう大分くたびれているけれど、それでもよく働く。家の中はせいぜいけれど、はしからはしまで吸い取るには相当時間がかかる。たまには、からぶきとやらもやってやろう。二十年間おなじみの家具もびっかりと淡い光を出すではないか。床の間というほどでもないちょっとしたつり床の前に坐って、花鈴の音などさせるとがらにもなくしっとりとした気分になる。早めにマーケットに出て、今夜の夕食に主人の好きなものをと目を皿のようにして買いものをすませると、午後にはたっぷり二、三時間の自由時間がある。本を読む、ものを書く、ピアノに向かって少々音のはずれた歌をうたう。黄昏色がにじむ頃、小さな小さな庭にさっと水をまいて気分を変え、台所にたてば、鼻歌まじりの調理人。料理は決して上手ではないが、「おとなのままことやないかしら」といつもおもう。好みの食器に盛りつける頃には御主人様も御帰館。あつという間に食事をすます様子を見ていると、もう文句も言わなくなったのは年期の功。

やはり、今の私の生活の中には何の制約もない、そのたのしみに満ちているから、家事もまた、すてきというのだろうか。職業をもっているときは、先ず何よりもそれが先行し、家事をしている間

は苛立ちつつけた。できうる限り、短い時間にそれを片づけ、一時間でも多く学校の仕事をしたかった。それはやはり修羅であった。女の一生の中には職業や育児や複雑な人間関係などをからめて、家事が地獄である時期もあり、やがてそれが掌の中で、まろめていとおしむ段階へも移ってくるのではないか。更にもうひとつ、「男と女とが家事を分担すべきだ云々」という意見も多いが、それも時期によるのだろう。夫婦というものはうんと弾力性を持っていなければ、こうでなければならぬときめつけてしまつて身動きが出来なくなる。

今年も春が移ろうとしている。家の中の様々なものから肌着のほしに至るまで、さわやかに衣更えをして、この生きていることのたしかかな手ごたえにひとりほくそえもう。庭の薔薇の蕾も、もう間もなく開くだろう。

じょうずに家事と付き合う法

東京都

馬場淑子

家事とは、いくらやってもきりのないもの。それなら、いっそ、できるだけじょうずに、手をぬいてやろう——こんな考えを、結婚まえからひそかに抱いていた私は、主婦となつて、ますます強くそれを感じ、あの手この手で初志を貫き、現在に至っている。

まず、三大家事のひとつ、炊事について。これは、直接家族の健康にかかわることだから、栄養のバランスには、神経を使うけれど、それ以外にはあまり気を廻さない。

材料の買い出しは、夏期をのぞいて、なるべく一週間分まとめ、同じ材料でも、少くとも三通りに変化をつけて、食卓にのせるようにしている。調理に三時間、食卓に三分などということは、我が家

ではめったにない。せいぜい、三十分ずつがいいところだ。つまり、普段あまり手のこんだ料理は作らない主義。そのかわり気がむくと、台所にたてこもつて、たっぷり時間をかけ、世界にただ一品、ともいふべき珍らしい料理に取り組むこともある。

つぎに、洗濯だが、これも一週間単位。一週間や十日は、どんなに着ても困らないように、あらかじめ家族全員の分を揃えておいて、途中、いかにすばらしい洗濯日和があつても、決して衝動洗ひなどはやらない。もったいないほどの青空のもと、隣り近所がいっせいに、色とりどりに干しはじめると、さすがにあせるが、そこをじつとがまんして、予定した仕事に没頭する。そのかわり、やるときは徹底的に、手がしびれるまで熱中。せんぶ干しあげて、それを眺めわたすときの、ささやかな幸福感は、男性にはわかるまいと思う。

そして掃除。やっぱり、これがいちばん手をぬき易い。玄関と居間だけは、やむを得ず毎日やるが、あとは必要に迫られたとき、部分的に手早くすませる。

なめたようにみがきあげなければ、気のすまないむきもあるだろうが、それは、掃除が趣味、という場合で、そのことが楽しいからそこまでやるのだ、誇りのために死んでいった人の話はあつても、埃のために死ぬ例はまれなのだ、と、自分にいいかせる。

主婦といえども、家事が得意な人ばかりではない。どんな人間にも、なにかひとつは長所があるはずだから、それを活かしたほうが、より多くの人の役にたつ、と割り切ること。家事の得意でない人は、社会の一単位としての家庭を破綻させない程度にやっていたら、充分なのではなからうか。こうして浮かした時間を、なんとかやりくりして、私は昨年、二度、日本を脱出した。いそがしく回転するヨーロッパと、のんびりムードのインドネシアを訪れて、それぞれの国の子ともたちの生活ぶりをみてくることができたが、これは私の仕事から、たいへん有意義であつた。そして同時に、我が家の男性

たちが、主婦の留守中、何日目のヒルの分、ヨルの分、と日付を入れ、冷蔵庫などにパックしておいた食品を、順序通り用いて、いざとなれば、一週間や十日は、あまり家の中を乱さず、なんとかもつものであることを発見した。

女性と家事の問題も、こうでなければならぬという、従来の概念にとらわれず、自分からあれこれ試みる主婦が多くなったことはよろこばしい。方法は、いろいろある。

結婚して、家庭をもった以上、どんなかたちにしても家事はついてもまわるのだから、まったくないがしろにすることはできない。

それなら、いっそ、できるだけじょうずに、自分の特質を活かして、家事とつき合っていきたいものである。

忙しいから幸せ

徳島市

喜多和子

結婚後もずっと働き続けてきた私が、家事に使える時間はわずかである。長い時間をかけて家事に専念することなく、家事をかたづけていく方法を身につけてきたようだ。

わが家の家事は臨機応変、手の空いた人がすることになっている。レパートリーは、年とともに、夫も、長男（中三）も、長女（小四）も豊富になり、ほとんどのことが出来る。

時間にあわせて、私にしか出来ないことをかたづけていく。ひとつひとつと思いながら……。効率と健康を考えて、家庭菜園をはじめてひさしい。結果は良好でわが家だけでなく、知人にもおすそわけが出来るようになって喜ばれている。子供たちが、自分のことが出来て他人のことも少しは出来る、そんな人間に育って欲しいと念じながら、いつも子供たちにいつている言葉は、「お母さんのいう

ことを聞けばいいことがあるわよ。」と……

やさしい夫も、子供たちもよく手伝ってくれる幸せな主婦のようだ。「母親がかわれば、世の中がかわる」のではないかと考えるこの頃である。

家事はライフワークではない

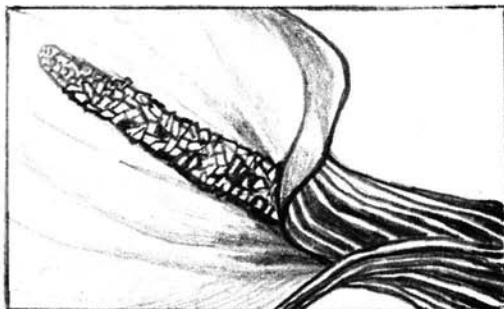
東京都

小河原三枝子

二十五年前、少し気取り屋の夫は、巨体の割には小さな口もとをゆっくりと動かしながらこう云いました。「母も年をとり家事をするのがたいへんになってきた、そろそろだれかに手伝ってもらわないと……」

なんのことはない、早くいえば私に嫁にきてくれとの求婚の弁だったのです。いまの人達だったら、一体ひとをなんだとおもっているのとおこっってしまうところでしょうね。そこはよき時代と申しましょうか、昭和も戦後の混乱期、民主主義の風は外を吹いているのみで、家の中にはそよとおとすれもない当時のこと、まして単純思考型の私は、夫のことはテレかくしなのだと早合点して、私の人生をこの人のために捧げようと思ったものでした。他人を喜ばせるといふことはわが喜びになり、縁の下の方持の意味も素直に感じていた時代。こうして私たち夫婦の結婚生活の形態は無言のうちにきまり、夫はサラリーマン私は家庭をまもり治める妻。

しかし、人生とはまなならぬもので、嫁いでみれば姑はまだ五十代で財布をしっかりと握り、嫁の私は家事手伝いといった立場でした。実家の母から、たくあんひとつ切るのにも、その家の家風で異なるから初めは姑の意向を伺ってからせよと聞かされてはきたものの、人の下でおこなう家事のつまらなさ、不自由さをイヤというほど味



わい、もうこれまでよと婚家をとびだそうかと考えるに至りました。そこへ夫の転勤という幸運が舞い込み、結婚八年目にして漸く妻の座にすわることになりました。薄給の上に、両親への仕送りと、婚家へ往ったり来たりの旅費もばかにならず、洋裁の内職までやって苦しい何年かが続きましたが、田舎での働きぐせがついていて、家事ぐらいいは辛い、つまらないと感じたことはなかったように思います。

このところ、女が家事をするということで世間がにわかにさわがしくなってきました。外に仕事をもつ妻が多くなり、昨年は国際婦人年という鳴りもの入りということでもあり、家庭の女達まで浮き足立ってきました。家庭における夫と妻の役割は、各々の夫婦で話し合ってきたこと。事情も素質も異なる夫婦を十把一からげで論ずるなどのもってのほかだとおもいますが。男女が結婚を決意する前に、その問題はお互いの中で充分論じられなければならぬとおもいます。さまざまな夫婦のかたち、生き方があっていいのではありませんか。お互いのゆずり合いによって平和な居心地のよい家庭が得られれば。一つ一つの音の調和によって美しいシンフォニーが奏でられるように。

「夫に食べさせてもらっているので云々」とよく耳にしますが、私にいわせると、とんでもない錯覚だとおもいます。それは、まれには恵まれた事情の妻もいるでしょう。おかたの主婦は、無給でこそあれ、とてもばかにならない

金額に相当する仕事を課せられていることは、家事時間を調べて計算すれば、われながら感心することになります。停年もいつやってくるのかわかりませんし、深夜の来客接待、寝たきり老人の看病など、休日すら、強く求めなければ得られることはありません。家事はたしかに大任といえましょう。しかしいまの私にとっての家事は、私が生きていく上での、しなければならぬビジネスであって、私のライフワークではない。家事に沈んでしまってはならない。私が、人間としてやりたいことはまだとてもできない状態ですが、家事の比重は、やがて半減する時がやってくることを期待し、そのころの私の生きていく上での息抜きぐらいいに変貌してもらいたいものだと思んでいるのですがむりでしょうか。

家事分担は夢のまた夢

柏市

徳光利子

一口に家事といっても種々雑多である。また主婦の年令によって、その量も時間的サイクルもさまざまだと思う。もっとも、これは専業主婦の場合であるが、多くの女性が職業を持つようになった当節、そのあり方もおのずから違った形態を持つのは、至極当たり前である。しかし、ごく親しい有識主婦の家庭を見てみると、家の中は乱れ、一日中落ちついてものを考える時間すら無さそうで、気の毒なような気もする。それは家事分担がなされていないからではなからうか。この間、NHK奥さんといっしょに“で、一週に二時間ずつ家族に協力してもらって、家事を分担し、うまくいっているという方がいたけれど、主婦が職業を持つなら、それは絶対不可欠なことだと思う。

さて、わが身を振り返ってみると、結婚当初から家事は主婦の領

分と定められたわけでもないのに、ごく自然に忠実にこなして来てしまったような気がする。今の三十代の方々は子供の数も少なく、家事はすべて電化され、四十歳にさしかかるころには、自由な自分の時間を沢山持てるようになる。その点戦中派の私たちから見ると、実にうらやましい。だがその自由時間を有効に使うことで、バラ色の人生が展開するのではなからうか。

さて、有識主婦の家事分担云々を書いたけれど、専業主婦の私でさえ、これをしたとつねづね思う。なぜなら五十歳少し前からずっと持てた自由時間をフルに回転したいから……。趣味もところんまでやりたいし、社会参加して視野も広げたいと思うと、時として家事が重荷になるからである。しかし、過去三十年有余の実績からして、私の思うように家族が動いてくれるだろうかという疑問におつかる。「ひとのやったことが気に入らず、何でもかでも自分でやらなければ気に入らないと言うのは最もわがままである」と、何かで読んだことがある。その点私は、実にわがまま者と言えるかも知れない。その上、家族は家族で何事も「お母さん！お母さん！」で通している仕末。家事分担などという立派なものでなくてもいい、各自が自分の身の廻りのことを、ほんの少し協力してくれたらと常々おもふ。

今の私は起床して食事の仕度、掃除、洗濯、庭木や花だんの手入れの後、夕食の仕度までが自由に使える。沢山あるようでないのがタイム。「タイム・イズ・マネー」の尊さもよく分る。

そんなわけで、私にとってややマンネリ化した家事は、決して好きではない。やる人がないからやっていると云った方が適当かも知れない。しかし、やるからには、心をこめて家族が住心地よいようにとの配慮はしている。

桜も散っていいよ新年度が始まった。私のささやかな社会参加の回数も多くなるだろう。家事分担が夢である限り、多少の手抜き

を必要とするかも知れない。どなたか上手な手抜きのテクニクを教えてくださいませんか。

家事は男女の共同作業

東京都

山本健二

(一)
家事とは何だろう？ この機会にあらためて整理してみようと思いついた。

ちょっと辞典を、と広辞林をひもいたら「一家の中の仕事」、「家政」とあった。ついでに「家政」を見たら「一家の経済」、「一家の生活のやりくり」、「一家の暮し向き」と書いてある。

おそまつながらばくは「家事」とは掃除、洗濯、炊事、修繕、裁縫——つまり狭い意味の「家の中の仕事」だけが「家事」と思っていることに気が付いた。

共働きのわが家では共存共栄、経済ややりくりは共同作業だから、これまでが「家事」に含まれるとたいへんな大論文を書かねばならないなあと、あらためて「家事」の偉大さを知った。

したがって「家事」とは、それなしには、やりくりがつかなくなり、暮し向きがどうなってしまうかわからなくなるほどの大事業の一つなのだ。これがばくにとっての「洗い直し」の第一となった。

(二)

ところで、ここでは狭い意味の家事、前述の掃除から裁縫までのことについて、日常感じてきたことを思いつくまにあげてみた。

ばくは今年四十四歳、看護婦の妻は四十三歳、娘は高二、息子は小五の一家四人である。

妻の夜勤が月十回。午前零時から八時半までの深夜勤と、午後四

時から翌午前零時半までの準夜勤の二種類ある。この時の夕食と朝食は、いやでも夫が受け持たねばならない。(子供が大きくなるにつれ子供もまた)

喰わねば人間は生きて行けない。喰うためには調理が必要になる(外食、テンヤモノもあるが、いつもこれでは経済がもたないし味気なくなる)。やむなくばくは米をとき、包丁をにぎり、味噌汁をつくることを覚えた。

必要は発明の母でもあるが、必要が家事のはじまりでもある。洗たく物がたまればきたないし臭い。やむなく手すきの時に洗濯機を回す。シャツのボタンがとれば慣れない手つきでボタンをつける。

すべてこれ共働きの必然で、やむなく覚えてきたものばかり。最初はいいやいやっているうちに、「今度はもう少しうまい味噌汁を」とか「もう少し洗濯をていねいに」とかほんのちよっぴり欲めいたものも湧いてくる。

かといって「家事が楽しい夫」は滅多にいまい。ばく自身もまた然(しか)りである。

(三)

ただ一つ、言いたいこと。それは「なぜ家事は妻の専業になったのだろうか」ということについて妻も夫も、もっとも疑問をもっているのではないだろうか、という問題である。とくに、なぜ、世の中の夫が家事に無関心になり、妻まかせになってしまったのだろうか、という問題である。

原始、家事は男女の共同作業だったはずだ。食べ、住み、着るための、一つ一つの仕事は男女の共同作業によって営まれていたにちがいない。

それが、いつの時代からか、男は外で働き、女は家を守ることが習慣となり、その固定観念が生まれ、現代では、それが当たり前に通

用してしまっている。

だが一方で共働きがふえ、婦人が経済的に独立できる社会的条件がひろがるなかで新しい次元で家事は男女の共同作業となりつつあり、「女は家を守る」思想は、かならずしも支配的でなくなりつつある。

ばくは、いつか、だれからか聞いた「婦人の解放は、家事からの解放でもある」ということが好きだ。

たしかに、婦人が働くことが当たり前となり、それが社会的にも保障されるような時代が到来した場合、家事はいったいだれの仕事になるのだろうか、ということは、人間の未来の非常に興味のある研究課題になるにちがいない。

(四)

最後に、「家事は、できることなら、しないにこしたことはない」という極論めいた逆説を説いた「家事整理学」という本があった。「するな」というのではなく、もっと「家事を整理せよ」というのである。ただし名言と思ってその本を読んだものである。

なぜなら、家事は際限がない。初めもなければ終りもないのが家事である。一つ終ればもう次が待っている。家事だけやろうと思っていれば、それだけで一生が終ってしまうほどの量と質が、家事にはある。だから「家事はしないにこしたことはない」と考え、整理し、合理化することに頭を費やすことの方がより大切と思う。

この原稿を書いているこの瞬間も妻は準夜勤。夕食の後片付けと朝食の米とぎがばくを待っている。朝起きればゴミ捨てが、またばくを待っている。チリ一つない、清潔な部屋の、ツヤツヤの机で書く原稿も、夕食の食器のヤマがワンサとあるちゃぶ台の片隅で書く原稿も、原稿にはちがいはない。だが「家事を洗い直す」原稿は、今書いているばくの方がよっぽど生活と家事の実感がこもっていることに誇りをもって投稿してみることにした。御批判を。

家事をどうとらえるか

武田京子

「家事なんてくだらないわよ」

ある主婦から聞いた話である。

熱烈な恋愛のすえ結婚した娘さんが、ある日、実家を訪れて母であるその主婦に言ったことが、

「お母さん、よく三十年も家事をやりつづけてこられたわね。家事なんてくだらないわよ。だって、やってつまらないもの」

だったのだそうである。曜日ごとにかけ換えるという手づくりの七色のエプロンを母に見せながら、「これをかけて彼のためにお料理をつくる自分の姿を想像すると、ワクワクしちゃう」と、ノロケっぱなしだった娘さんのおもしろくなさそうな顔。

「私は家事をくだらないなんて考えたことがないのに、娘の気持ちかわからない」

と、その主婦は嘆く。

この母と娘にかきらず、今日、家事を役割とされて台所の流し台の前に立つすべての女たちが、みんな同じ気持ちでいるとはかきらない。それぞれが、おもいおもいの気持ちを抱えて、めいめいのやり方で家事をやっているというのが現状なのである。そし

て、いまほど家事のとらえ方が多様化し、方法論もバラバラな時代は、これまでになかったこともある。

さて、この娘さんのように、「家事はつまらない」と言うものもあれば、「家事ほどおもしろいものはない」と言うものもいる。また、「つまらないとも、おもしろいとも思わないけど、やらなければならぬからやっているだけ」と言うものもある。

ここで注意しなければならないのは、つまらないとか、おもしろいとかというのは、家事のとらえ方ではなくて、家事労働に対する感想である。家事が好きとか嫌いというのもそうである。たしかに、物ごとのとらえ方と、それに対する感情とは切りはなせない面もある。「ずるい人は嫌い」といったように、その人をどうとらえるかが、その人への気持ちを決定するという具合にある。

だが逆に、気持ちごととらえ方を決めていくとなると問題がある。「家事なんてくだらないわよ。だって、やっておもしろくないもの」といった結論の下し方は、やはりおかしいのである。どうとらえるかがまずあって、それに対してつまらないとか、おもしろいとか、好き嫌いとかの感想を持つことはかまわないし、自由である。つまらないと感じる人にもおもしろいと思えと強制したり、



嫌いなものを好きになれと押しつけたりすることはできない。
家事のとりえ方の場合も、大切なのは「家事労働をどう思うか」ではなくて、「どうとらえるか」なのである。

家事よ、どこへ行く

家事とは、人間が生活していく上で必要な、衣食住や育児看護などにかかわる実務を家庭単位でまとめたかたちをいう。

人間はだれでも食べたり着たり憩ったりしなければ生きてはいけない。だが、人間が一人ひとりバラバラに生活して、自分の衣食住のめんどろだけみているなら、「家事労働」というものは存在しない。下宿暮らしの独身者の炊事洗濯掃除を「家事労働」とは言わないのである。

人間が家族として共に生活することで、めいめいの衣食住のめんどろが、家族の衣食住のめんどろというかたちでまとまってきたに、はじめてそれが「家事」になり、その家事を行なうことが「家事労働」となっていく。

ところで、この家事労働を家族みんなでいっしょにやるかたちがとられていれば問題はなかったのである。だが、そうではなくて、家事労働が女の役割とされ、家族みんなの衣食住のめんどろをまとめてみるために女が家庭にいないかならないかたちになっているために、家事労働が大きな問題性を持つてくるのである。

いまの社会では衣食住のめんどろをみる行為は、たとえ独身者の場合であれ、家族全部のぶんをまとめてやる場合であれ、私的労働とされている。家族みんなの衣食住のめんどろをまとめてやる家事労働が、どれほどたいへんな労働であっても、だれも報酬を払ってはいくれない。家事労働はただ働きなのである。

ただ、妻が家事をやってくれるかわり、妻の生活費のめんどろは夫がみるという社会慣行があるだけである。家事だけをやって

いる妻は経済的に夫に頼らなければ生活できないのである。

妻が家事だけをやっているかきり、妻は夫の従属物であり、経済的自立なしには男女が対等の地位を持つことができない。家事労働は女の自立と男女平等をはばむもの、というとりえ方がここから出てくるのである。そして、家事労働を女がやらなければ問題はなくなる。家事を家庭の中からなくしてしまえ、という論理になってくるのである。

家庭の中から家事をなくしてどうするかと言えば、社会の手で人間みんなの衣食住や育児看護のめんどろをみるというのである。食べたり着たり憩ったり、子育てをしたり病気をいやしたりするのは自分のためではなくて、明日の労働力の再生産のためなのだから、社会がやってくれるべきだ、とするのがその理由である。つまり、これまで私的なものとされていた家事労働の評価を社会的評価に変えて、家庭の外に追い出していくわけである。言いかえれば、家事の社会化である。

日本の婦人解放運動も「家事の全社会化」を要求して、ずっとこの線できていた。この婦人解放論の中では、家事が女の生活からなくなっていくこと、つまり、家事をやらないで男と同じように身がるになり、収入を得ることのできる社会的労働につくことが女の解放である、ととらえられている。

家事労働にお金を払って！

さて、こういった家事の社会化に反対するものとして、別の家事のとりえ方がある。

それは、家事労働に報酬を払えとする家事労働有償化論である。その理由として、衣食住その他のめんどろをみるのは、労働力の再生産行為として社会の手でやるべきなのだから、家事労働というかたちで家庭でそれを代行しているものには当然報酬が払われ

ていいはずだということがあげられる。これも前の社会化論と同じように、かたちは違っても、家事の社会的評価を言っているわけである。

このかたちであれば、家事だけを行う専業主婦であっても経済力を持つことはできる。しかし、女も社会の中で生きたいという欲求は満たされることができない。家事労働が女だけの役割とされていることの問題性は、単に女の経済的自立の面だけではなく、社会参加をはばむものとしての意味も大きいのである。

ところで、家事をなくしてしまえという社会化論と、家事労働に報酬を払えという有償化論は、どちらも家事を女の役割とみている。社会化論は一見そうではなさそうだが、よく考えてほしい。ここでは、衣食住の世話を役割とする女の仕事を、家事労働というかたちから解放しようとしているのであり、決して女の役割そのものから解放しようとしているのではない。

現実には家事社会化のプロセスにある社会主義体制下の諸国では、家事の社会化施設、たとえば保育所、食堂、洗濯所などで働いているのは女たちである。女たちは家庭の中で衣食住のめんどろをみなくてよくなったかわりに、社会の中で職業として収入を得るかたちで衣食住のめんどろをみる役割を担っているのである。ただ、家庭の中で男女の分業がなくなっただけで、それが社会という広い場での男女の分業に変わっていったにすぎない。

衣食住は好きにやりたい

このような二つの家事のとらえ方に対する批判としてでてきた家事論がある。それは、衣食住のめんどろをみるのが女だけの役割とされていることが基本的なおかしいとするところから出た家事男女協業論である。

これは一九七〇年代に入って新しく登場した女性解放論の中の

家事のとらえ方であり、家庭の中だけでなく、社会のあらゆる分野で男と女の役割の区別をなくしていこうというものである。そのためには、男を社会的労働に向くように、女を家事に向くように育てあげる根本のところから変えていかなければならないとする。「男は外働き、女は内働き」の性にする役割分業が、男と女の本質にそくした自然なかたちとする意識を男女共にかえ、男女共に衣食住についての知識や技術を身につけることで家事をいっしょにやっいていこうというわけである。昨年の国際婦人年中をにぎわした「ボク食べる人、ワタシ作る人」のCMの批判などもそこから出てきている。また、家庭科の男女共修運動などもそうである。

ところで、あらゆる分野での男女の役割区別をなくし、家事も男女共にやるべきというとらえ方も、方法論となると二つの違ったかたちにわかれる。

ひとつは、前に述べた家庭の中から家事をなくして社会化するやり方であり、その社会化された衣食住のめんどろを男女共にみるというものである。つまり、保育所には保育だけでなく保父も、病院には看護婦だけでなく看護夫もいるといったかたちである。もうひとつは、人間の衣食住は私的なものとして社会化などせず男女共に自分たちの手で自由にやりたい、衣食住をおしきせとして管理支配されたくないというものである。そして、眠ったり遊んだりすることにだれも金銭的な報酬をもとめないように、あくまでも私的な権利として、ただで衣食住や子どものめんどろを男女共にみていこうというのである。たとえば、子どもを二十四時間保育所に預け、そこで専門の保母保父が子どものめんどろをみることで、自分たちの生活の中から子育てがなくなっていくことを子育ての権利の喪失として拒否するのである。

しかし、現実には二十四時間自分たちの手で子育てをしようとする

れば、たとえ男女いっしょにやったところでもかなり無理がある。父親も母親も職業を持って社会で働くことが現状ではできにくくなる。

そこで出てくるのが家事育児の共同化論である。社会化と共同化は違ふ。社会化は社会の手に移すことだが、共同化は自分たちの手ににぎりしめて、その個人が集まって集団で共同でやることである。この考え方による育児の共同化はすでにあちこちで行われはじめている。自分たちの子を集めて親たちが男女共に保育にたずさわりながら、職業としての社会的労働もつづけている。ただこの場合も現状では親の職業はかなり時間的に自由のきくものでなければできないという限界がある。家事育児の共同化をめざすならば、まず社会的労働のあり方から変えていく必要があるのである。

人間解放へ向けての家事のとりえ方

このように家事のとりえ方にはさまざまなものがある。そして、人間の衣食住や子育ては、人間が生物として存在するかぎりときれることなく必要とされるものであるから、家事のとりえ方がどうかわかろうと、現実はその人なりのやり方で生活の中でつづけられている。

お手伝いさんをやとって家事を全面的にまかせるもの、外食やクリーニング屋、掃除屋（近ごろこんな商売もできた）をフルに利用して商業ペースでの社会化をやっているもの、「栄養さえとっていれば味は二のつき、埃はあっても人は死なない」と家事の手抜きの上に居直るもの、あらゆるべんりな道具やインスタント食品などの商品を使って家事の合理化をはかるもの、あるいは逆にできるだけ手づくりにしていていねいな家事をしようとするものなど、いま行なわれている家事のやり方はさまざまである。

こういったさまざまなやり方が、これまで述べてきたどの家事のとりえ方から出てきているのか。あるいは、そんなものなしに、ただ現実には生活の中にある家事をやみくもに消化しているだけなのか。四つに大別してみたが、家事のとりえ方はもっと他にもあるかもしれない。いずれにしても、家事をどうとらえるかの上に立って現実には家事をどうやるかが考えられる必要がある。しかも、そのとりえ方は、自分個人だけを見つめないで、家族から女全体へ、さらに人間全体へという横の広がり、現在から未来への時間的なタテのつながりを持ったとりえ方でありたい。

家事をとらえるとき、家事だけを抜きだして考えることは実はできない。人間の生活全体をどうとらえるかの中で、家事のとりえ方もおのずから決まってくるのである。人間の生活の中には、働き、食べ、憩い、学び、育て、楽しみ、着るといったいろいろな部分がある。それがみんな生活の中に含みこまれて、そのどの部分も満足できるかたちで自分の自由になるといった生活が、人間にとって理想の生活であり、解放された人間の生き方ではないか、と私は考える。自分から働くことを捨て、衣食住の中の自由さを捨てるかたちで人間がトータル（総括的）に生きられなくなる道をえらぶことは、人間解放から遠ざかっていくことである。

女だけが家事を役割とされる現実を、女性差別とか女の自立とかいった女性解放的な視点からだけとらえようと、その解決によって女性としては解放されたが、男女共に人間としての束縛がより強まったということになりかねない。人間解放への道のりは遠くに違いないが、その人間解放の視点で家事をとらえなおし、現実の家事を変えていくことを、めいめいが息ながくつづけたと思うのである。

（評論家）

家事の未来

——コンピューターが家庭を変える——

田中昭二



近頃は、自動販売機が町のあちこちで見られるようになった。天ぷらうどんからラーメンの販売機まで出現したとのこと。このことが同僚との会食の席で話題となった。私が販売機の構造のことなど説明すると、「君、今に帝国ホテルのシェフの料理が、我が家で自動的に作れるようになるかね」と質問された。「なるでしょうね」と答えたものの、これは後で大変難しそうなことがわかった。しかし、これが私が家事の省力化について考えるきっかけとなった。

以下多少専門的になって読みづらいと思われるかも知れないが、最後までお読みいただければ幸いである。

(一)

最近、特定の分野の技術革新が目覚ましく、将来、その社会的影響は非常に大きいと云われている。それは、いわゆる「超LSI」とよばれるものである。「LSI」とは、近頃とみに普及した電卓の心臓である。

日本は、電卓を年間四千万箇生産し、実に世界の七割を占めている。このおかげで、いろいろな計算も簡単な操作で行えるのでおかげをこうむっている「わいふ族」も少なくない筈である。この分野の進歩は実にめざましく、五年後位には、現在の百倍位、能力が向上するといわれ、「超LSI」と呼ばれるようになった。政府も、この重要性を認識し、今後四年間に、一千億円近い開発投資を行ない、一気に「超LSI」技術を完成させることを予定している。一センチ角にもならない板上に、実に百万本の真空管を並べたのと同じ能力を示し、しかも、値段は、一本一銭(一)にも当たらないと予想されている。元来、これは、大型コンピュータ用として開発されるのであるが、その波及効果は甚大なものがあると思われる、今のところ一寸見当もつかない。というのは、わいふ族の未来の生活にも密接に関係しているからである。

そもそも、一年間に三十兆円という、途方もない軍事費を使っているアメリカやソ連とちがって、日本の産業は民需一辺倒である。したがって、どんなに高級な技術でも、民需に結びつかない限りわが国では成り立たないという大きな特徴がある。いかに智恵をこらして完成した「超LSI」といえども、これを装備した製品が、現在の電卓のように、各家庭に入り込めるようなものにならない限り、産業として成り立たない。

この点で、各メーカーは、今から抜目なく、いろいろなことを考えている筈である。そうして、教育、医療などの進歩のために

利用されるだけでなく、結局は、わいふ族に愛好されるようなしるもの——家事の省力化——に、いかに「超LSI」を使うかに、智慧をしぼることになるような気がする。それは、情報社会が、第二期に入り、社会が質的変化を遂げることを意味するのも知れない。

「超LSI」というとかく聞えるが、これはコンピュータそのものだと思っていたに結構である。電卓も小さなコンピュータの一種である。いまの電卓と比べものにならないほど高級なコンピュータが、家庭に入った場合、いかなる事が起きるか。

(二)

その前に、コンピュータが現在の社会をどのように変えつつあるかを調べてみよう。

農業、鉱業のような一次産業を一応別として、製鉄とか自動車のような第二次産業を見てみよう。ここで最も目立つ点は、コンピュータによる省力化である。かつて蟻のむらがるように、沢山の労働者を抱えていた製鉄所は、現在では人影もまばらである。たとえば、最新型の熔鉱炉では、千種類の異なったデータを常時とっていない必要はないが、現在は、すべてコンピュータを駆使した集中管理方式となつてしまひ、ほとんど人間を必要としていない。ある所で、新しく製鉄所が建設されるというので、昔の製鉄所を考えていた地元では、多くの労働者が移住して来るものとかん違いをして、バーやキャバレーを沢山作つたが、結果は案に相違して、結局、バタバタと店仕舞いをしたという笑えぬ喜劇もあつたそうである。

これに比べれば自動車などの機械工業の省力化は、もう一段難しい。

自動車工業には、フォードが発明し、チャップリンが資本主義

の象徴としてからかった、悪名高いベルトコンベアーがある。ここでは、人間が機械により酷使されるような場面が永らく続いたが、どうやら、省力化は急速に進みそうである。

ベルトコンベアーに飽きた労働者の意欲を向上させるために、スエーデンでは、一グループの労働者が、始めから終りまで、自動車を組み立てることを試みているが、そのために、価格が非常に上つてしまひ、自動車は売れなくなってしまった。消費者は残酷である。労働者のことなどお構いなしで、安い車を買つてしまふからである。日本やアメリカでは、この問題を、コンピュータによる省力化で解決しようとしているが、おそらく、この方が正しい解決になるに違ひない。労働者の大部分は、ベルトコンベアーから解放されるか、労働時間の短縮をもちとることにならう。情報やサービスに関するいわゆる第三次産業は、これまでも、コンピュータが活躍してきた分野である。コカコーラから鉄道の切符まで、ほとんど自動化され、人間の姿は消えてしまった。銀行の窓口から、女子行員の姿が消えるのも、数年後にせまつてゐる。こうなつてくると、人間は、自ずから、機械と直接向かい合うようになつてきて、問題は途端に難しくなつてくる。

何でも省力化し、自動化すれば、人間は満足するかどうか。つい最近、政府の援助で国分寺に開店した無人のスーパーマーケットが、わいふ族の拒否反応にあつて閉店のうき目に会つてしまつた。これは、さわつて確めなければ買ひ気が起らないというわいふ族の心理に逆らつた結果である。つづけどんな国鉄職員からよりは、自動販売機から切符を買う方がよっぽどいいと思つても、銀行に女子行員が一人もいなくなつたら、世の男性は、いささかがっかりするに違ひない。

この情報化の波は、各家庭に押し寄せはじめてゐる。最近、多摩で生活情報都市の実験がはじめられた。これは、その区域内で

の、教育や医療をはじめ、ゴミ集めに関する情報までが、ファクシミリやテレビでセンターから一戸毎に送られてくる仕組みである。これは、今年の四月にはじまったばかりなので、その成果をみるには、もう少し時間をかけなければならぬまい。さらに来年には、もう一つの情報都市が奈良県に作られるはずである。これは多摩より一歩前進して、各家庭から、情報センターに、家庭毎の情報が送られる仕組みになりそうである。詳しいことはまだ決っていないが、政府は、この実験に、実に三十億円位を使う計画を立てている。

これらの実験が、たとえ失敗に終わろうとも、未来の大衆が情報化に如何に反応するかを知ることができるから、貴重な経験となるに違いない。そうして、結局、程度の差はあっても、社会生活の情報化のうねりは益々大きくなり、家庭を呑み込んでしまうのではないかと、私は思っている。

なぜならそれは、日本の産業構造の根本にかかわる動きだからである。

石油ショックを受けた時のわれわれは、これで戦前の時代に逆戻りでもするかと考えたが、それは大きな錯覚であった。日本人が考えなおしたことは、産業構造を、資源を消費する製鉄のような第二次産業よりも、より知識集約的で、附加価値の高い情報産業に力を注がねばならないということであった。資源も余り使わず、公害も起さないこの産業は、日本が生きて行くための重要な柱となり得るに違いない。

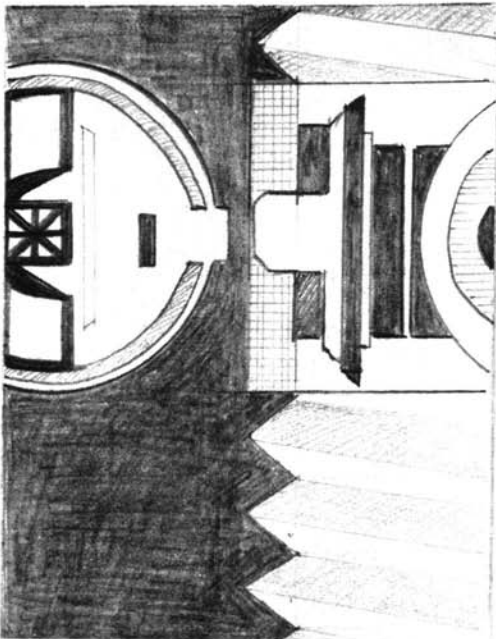
コンピューターを中核とする情報産業を、輸出産業として育てるためには、まず国内の情報化を高度なものにしなければならぬ。そのために、政府を中心とした前述のいろいろな実験が行なわれ、また企業も、社会や家庭を情報化するために、いかなるものを、いかに安く作るかに智慧を絞る結果となって来たのである。

(三)

私は、一九八〇年代を境にして、日本に新しい情報時代が到来するものと考えている。未来をうらなうことは難しいが、私なりの展望を簡単に書いてみよう。

まず、第二次産業では、省力化が徹底的に進められ、工業人口は減少する。これは最近発表された統計でもはっきり表われており、第三次産業の人口比率が第二次産業のそれを追い越しはじめている。これは、一面では労働者の労働からの解放にもなるが、反面、下手をすれば失業者の増加をまねきかねず、大変難しい問題であると思われ、とくに女性の就職問題に深刻な影響を及ぼすかも知れない。

第三次産業はどうかというと、これまでの、いわゆる誰にでも



できる簡単なサービスは、ほとんどコンピューターにとって代わられると思つたほうが無難である。それならば、いかなる職業が人間に残されるかを論ずることはたいへん難しい。それはその時の社会のあり方や、大衆の意識によって大きく変動すると思われるからである。

無人化された銀行よりは、一人でも美人を受付に立たせた銀行の方が客が行くようになれば、銀行では無駄と知りながら美人の行員を募集するかも知れない。しかし、たいへん当てすっぽうであるが、どうも、日本人は前者を選択するような気がする。ある人が、三十年間にわたって、隆盛を極めるパチンコを日本人の特徴として挙げたのを記憶している。周田から隔絶し、ただ一人機械と向き合つて、無心に指を動かしているパチンコ人種が、日本人の典型だといふのである。そのパチンコ族も、最近コンピューターによって、タマの出具合が自動的に記録され、自動補給になつてゐるのをあまり御存知ないようである。もし日本パチンコ文化説が正しいならば、日本人は、比較的社交性に乏しい反面、知的好奇心に富み、生来機械好きの国民ということにならう。

これは、社会の情報化、無人化を促進する原動力となり得るのであつて、今の勢いでは、近い将来、高度に情報化された管理社会が出現することになりそうである。そうして、この稿のはじめに書いたように、一戸に一台ずつ、「超LSI」のおかげで、小型でかつ安くなつたかなりの程度のコンピューターがそなえられ、多くの情報を交換することにならう。たとえば、お惣菜の販売会社ができるとする。その会社は、毎日、その日の献立を地域情報センターに届けておく。わいふ（夫でもできるが）は、コンピューターのボタンをおせば、その日の献立やカロリーまで知ることができ、好きなものを注文すればよい。老人や幼児は毎日の身体の様子をコンピューターに打ち込めば、毎日の記録を取つておく

こともできるし、必要と判断すれば、地域の看視センターから医師や看護婦がかけつけてこよう。その他考えれば、実に多様の利用法が考えられよう。

ここでお断りしておくが、コンピューターとは、単に計算をする機械だと思つておられる方もあるかもしれないが、実はそうではなく記憶とか、演算とか、人間の脳味噌の基本的な働きと同じものをもっており、ただ、まだまだ人間に及ばないということだけである。たとえば、知人の電話番号を知りたければ、姓名をコンピューターに打ち込めばよい。コンピューターは記憶ファイルのなかから、その電話番号をひろい出し、知らせてくれる筈である（まだ実現していないが）。汽車の発車時刻を知らせることなども、システムさえできれば簡単な仕事である。したがつて、コンピューター一台が家庭に入ることとは、地域情報センターができるば、家事に必要なほとんどすべての情報を居ながらにして知ることができるとを意味している。

その結果、これまでの家事は、家族が、多少画一化された食事などを受け入れさえすれば、極端に簡単化されてしまうことであらう。これは、現在のわいふ族の欲求不満を多少解消することになるかも知れない。

しかし、しかしである。職場から解放された亭主族と、家事から解放されたわいふ族の大集団は、一体、どちらの方向をめがけて動き出すのであらうか。このような発想はSF的だといわれるかも知れない。しかし、程度の差はあるにしても、これは技術的側面から見た現実なのである。

英国のタイムズの編集長は、慧眼にも、日本の将来を予見し、コンピューター国家と呼んでいる。十年前にアメリカで唱えられた脱工業化社会は、一足先に日本で実現するかもしれないのである。

（物理学者）

座 談 会

家事のねうち



樋口恵子

平岡ふき子



林世志江



滝沢洋子



能勢智子

◆「私にとって家事とは何か

能勢 自分の身のまわりの仕末をすることだ、と考えています。

母親が子どもに「自分のことは自分で」と嘆けるでしょ、あれが基本だと思っています。

私は共働きで、もう26年たちました。

息子が二人。我が家では「家事は女性問題でなく男性問題」なんです。

これがハッキリしましたのは三年前、お手伝いを止めた時なんです。はじめて出産した時保育所がなくて手伝いを雇わなければ産休明けに間に合わない。その時来てもらって十年勤めてくれたお手伝いを三年前に止めさせたんです。

その理由というのは、下の子がとても可愛がられて育てられてきた為に、母親である私と、子ども、お手伝いの三角関係なんです。子どもは「お水！」といえはお水が出てくるという上げ膳据え膳の生活なんです。

これでは私たち夫婦が家庭を持ってやってきた理念というか理想というのか、これにはずれてゆくばかりで、私も四十才にもなりながら何を遠慮する必要があるんだろうって、思い切って水いらずで家庭を建て直す覚悟で止めてもらったんですね。

ところが、お手伝いに育てられた子どもが持ち出す問題というのが私に向けて云われる、いわゆる外の批判そのままだね。

そこで、とってもハッキリした形で、家事は男性問題として、私はとらえたのです。

林 私の場合は、一人息子のところへ嫁いで、嫁と姑の問題。姑は地球は自分の為にまわっている、というような人ですから、十年間位は「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」という風でした。

子どもの躰は放棄して、自分は家政婦として生きるというような悲慘な気持でやってきたんですが、十年もたって、私もこれではないんじゃないかと……

でも私と同じ年代の人がいったいどんなことを考えているのか話し相手がないからわからないですね。

雑誌やテレビで垣間見る程度でしたが、私に家が縛りつけられているから、こうした希望も展望もない生活をおくっているんじゃないかと思ひまして……

それまで私も「家庭」とは何なのか、あまり考えたこともなかったんです。ある機会に外国人に「どういう風な躰をなさっているのか」と尋ねたところ、「子どもは五才位までに独立心を植えつけてしまつて、子どもは子ども、夫婦はカップルで行動するという意識に育てる。」と云われて……

姑の考えや夫の考えを家の中にいて直そうと思つても、それは無理だと気づいたんです。私自身も反省してみれば当時は考えが甘かった、というのか、唯もう相手の云うことに反撥するばかりで、相手を説いて自分の思う方向に行かせるということを考えなかったのです。今はうまく話し合つて、相手を自分のペースに乗せることが必要じゃないかな、と思ひますね。(笑)

あれこれ考えてみると、私は家庭と家事を併せて、「経営」というか企業の経営のようなものだと思ひていますね。

今、地域の教育懇談会の世話人と、新宿区の高校問題連絡協議会の代表世話人をしていいますが、そちらの方の、つまり外のスケジュールをきちんと立てて、主人にも「これ文は私の生き甲斐だから、とりあげられたらこの家を出てゆくより仕方ない。」つて云う。(笑)

主人も「一家のことさえちゃんとやっているなら致し方ない」つて、でも運動の実績が上がるのを見て、最近「お前たちのやっていることは建設的なことだ」と評価してくれるようになりました。

具体的に家事の事と云えば、収納を完全にするということで、物が散らからない、というのを主眼に子どもたちにもさせてます。「出した物は元のところへ」の原則だけね。「家族が協同して家庭の合理化を図る」とい

うような行き方を考えてやっています。

司会 お二人の話だけですが、これ文で家事の中の広さ、掃除、洗濯だけでない人間関係を含んだ、なかなか広さを感じさせますね。

滝沢 結婚して七年、共働きです。

五才と三才の子どもがいます。二人とも無認可の保育園に、デキタナと思った時に申し込んで……(大笑)

だって、生まれてからでは遅いんです。どこにも入れないじゃ困りますから……

私は家事を余り理論づけしないんですが、「翌日、翌々日、将来の生活ができる基盤」というように思っています。

勿論、夫の協力がなくてはできませんね。

夫は料理、洗濯、掃除、育児、何でもやります。よく馴れてあるというか……(大笑)

司会 そうですね。ご主人が何もしなかったら共働きはできませんよね。

滝沢 でも共働きでも全然協力のない家もありますよ。私の話を聞いて、「それじゃ一度ウチに来て話をしてよ」なんて。(笑)

でも主人がやってくれることを私は本当に感謝しています。親がどちらも遠いので、頼ることもできませんし。

私はどちらかと云えば家事をサボる方で、その時間は、本を読むとか、子どもと話とかにもってゆきたいんですね。

平岡 私が18/9年やってきた経験からいいま

すと、家事は非常に簡単だと考えてたんですね。必要以上にキレイにすることもないし、必要以上のご馳走をすることもない。

自分は仕事をしたいんで、その仕事をやりやすくするために生活できればいい、と考えてました。

本当に食事の跡かたづけなんてやったかどうか覚えてない位ですね、夫婦二人の時は。ところが、子どもが生まれた時、妻に先立たれた舅を背負い込むことになって止むを得ず仕事を退職したんです。

夫は私の仕事に理解はあるけど口だけで、手伝ってなんてくれる人じゃない。(笑) いざ仕事を止めるとなると誰ひとり反対してくれないんですよ。夫も舅も。

誰も手を貸してくれない。保育所もない。三人目の子どもでやっと保育園に入れた。舅がやっと再婚してくれたら、私の母が亡くなって今度は父が一人になってしまった。私の家はそういうものか女手が足りなくて何かというと駆り出されてしまうんです。

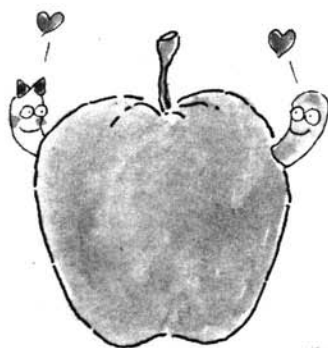
東奔西走してお手伝いをさがしたり、再婚の相手をみつけて仲人したり……(大笑) 実家の父もやっと再婚させてホッとしたら再婚の相手の人が急死しちゃったんですよ。結局、父の面倒を誰がみるかという、嫁いでいる私しかない。

私はお手伝いのいる家庭で育って不自由し

なかったから娘時代に家事を手伝ったことがないんですよ。

だから家事は簡単だと思っていたのね。ところが、こういう事が続いて、最後に父を背負いこんで完全に家に縛られてしまったの。

私が家事ということを痛感するようになったのは子どもたちが育ってくる段階で、家庭



は共同生活なんだから私ひとりが背負うことではないと考えたこと。子どもたちには小さいうちからどんなやらせました。

でも、女の子には余り家事をやらせなかったの。やらせなくても、どうせいつかはかかってくることなんですよ。

私も料理ひとつ習わなかったけれど、人間

の生活って習わなくてもできるような気がして……

でも子どもたちも高校生になるとちょっと無理なんですね。勉強やクラブ活動を削ってまでさせるのは私もイヤだったし、

夫も休日寝てるのを起こしてまで洗濯させられない。結局、家事というのは誰か大元締めがいてやらなくちゃならないでしょ。

それはいつも家にいる者なのよ。

たとえば電話。この取次ぎだって家にいる者がしなくちゃならない。

たまたま留守番していた息子が悲鳴をあげたけど、家にいる者は日常のことですよ。

私は、そういう事(老人の世話、税金の手配、引越してから、電話番号まで一編集注)全てをひくるめて家事「一種の家庭経営」と考えていますね。

家族ひとりひとりが自分の身のまわりのことをやったとしても、どうしてもそこから落ちてくることがあると思うんですよ。

家にいること、それ自体が家事なんですね。

私の属しているグループのいわゆる専業主婦たちが「自分たちは何もできないから家にいる」というけれど、それはおかしい。

家にいてやっていること、それ自体が働いていることだと思うの。私自身、家の中で苦しい思いして働いていたんですよ、それは本当にそう思うのよ。

◆家事はお金で評価できるか

司会 何か皆さんの自叙伝を伺ったみたいですが、(笑)このお話の中に面白いことがありましたね。

「女の子には家事をさせなくてもどうせかかってくる」とか、「女手は駆り出される」とか、つまり女の人であるが為に家につかまっている、家族の総まとめ的存在になってしまふという、どうして女はそうなるのかしら。

能勢 それは伝統だと思うんですよ。

林 私は銀行に勤めていたんです。

女の仕事というのは男の補佐で矛盾だらけでしょう。だから家庭に入ってみると家庭の経営の方がOL生活よりもずっと生き甲斐を感じますね。

家庭の運営というものを、お金で評価してはいいという気はないんですね。

運営が任されて、家族関係がうまくいって経営状態がうまくいって、それでいて自分の時間もある、というなら家事の責任者になってもいい、と思います。

司会 それは逆にいうと、外で責任のある仕事につけなかったから、ということね。もし、外で責任ある仕事につけたらそっちの方が良かった、ということ?

林 そうねエ。(笑)

司会 家事が評価されない、ということについてどう思われますか。無給ということね。

ことに働いておられる方、外でお給料をいただいて、家事も評価されたいですね。

樋口 私はずっと働きつづけてきたので、ことさら家事の評価って考えたことなかったですね。家事中心じゃなかったから。

能勢 私は家事の評価が出来ない、とか働く主婦と専業主婦が対立してとかく共感が持たないというのは、「評価」ということが大問題なんだから、と思いますね。

世間では、女は馬鹿だ、能力が低いという考えがあるでしょ。(笑)

司会 でも馬鹿じゃ今出てきたようなことは出来ませんよ。(笑)

能勢 ええ、だから私の云うのはそうじゃなくて、女が馬鹿だったら賄い切れないでしょ。

そこには知恵も工夫もあってここまで切り抜けてこられた。私も理科出身ですから家庭雑誌で覚えたとか、驍けられたとかいうこと全然ないし、唯、自分が養われたくないからここまで勤めてきた、ということね。

平岡 私も夫に収入がなかった時は働きましたけど、養うとか、養われるという意識は全くなかったですよ。他人はいろいろと云いましたけど。

能勢 私たちは夫婦共研究者なんです。

ところが二人目が生まれた時、保育園やお手伝いを使っても夜十時までに私自身が洗濯や跡片付けを終わらないと勉強の時間がなくなってくるわけね。

夫の方は油の乗ってる年令で、夜九時から一時二時まで勉強していられる。「俺は家事はやらないぞ」と誓言して何もやってくれないし、産後、とくに二人目の産後は回復が遅れて勉強どころじゃないんですね。

家事というのは他人に頼めるものと、頼めないものとがありますね。

私たち夫婦は家事の中で置き換えられるものは置きかえてゆこうと決めていたんです。理科出身ですから合理化することです。は抵抗はないんです。

だから夫は「そういう約束なんだから、お手伝いが足りなければもうひとりで頼め。お前は人の使い方が悪い。」という云い方するの。

でも、人を捜したり頼んだり私の仕事として押しつけてくるの。不合理だと思いましたがね。仕事、家庭、夫婦、子ども、あれやこれやと二年間迷いに迷って研究職から事務職に変わりました。

さっきの話に戻りますが家事の評価ということですが、家庭の運営部分以外で他人に頼めるという部分がありますね、家事には。

合理的に暮らす為に私たちはそうやってきました、それだっという加減にやってきて

はいない。むしろ家族とか生きるという部分を大切にやってきたつもりなんです。

ところが働く女たちへの評価の中に「インスタントラーメンで暮らしてまで外へ出ることはない」というのがあります。

(そう、そう……私も云われた……など、さままの声が出る)

インスタントがイヤなのか、ラーメンが嫌いなのか。(大笑)

◆家事は愛情の表現?

林 私は散々云われてきましたけど、つまり手造りじゃないということが……

能勢 そうなんです。つまりその「手造り」というところに家事に愛情の表現を……

林 私も、しよっ中それを要求されてるの。能勢 「手造り」ということは女の立場からすると、「私はそれだけ愛情を注いでいる」ということでごまかしになるし、男の立場からすると、家事の中に自分への愛があるかないかと……

司会 それ面白いことね、家事に愛情の表現を求めるというのは。となると、家事は巾が広いところか……

林 私が合理的ということを云うと、夫は、「お前には情緒がない」って云うの。(笑)

情緒だって。情緒ってナニ。なんて夫に尋ねると結果的には、私には本質的に情緒のない欠陥人間だって結論になっちゃうの。

司会 だけど家事の中に愛情とか情緒とか含めるとなると大変な問題だと思うのね。

樋口さん如何ですか。

◆家事は男性社会の下請か

樋口 これで大体家事について出尽したのじゃないかしら。いつもここまで含めて考えないから論争をいくらやっても、何となく「だけど」という気もちや、「そうばかりはいかないし」というのが残ったりするんですよ。

これは今、個人史みたいなのをお話くださったから、全部含んで出てきたんだと思うんですよ。

そこで主婦が現実には背負い込んでいる家事の中に、先ず基本的に人間の生活習慣の拡大——生活的自立といっていると思いますが、これは、手を洗ったり顔を洗ったりの身のまわりを整えること——これは各自が自分で行うべきなのに日本の男性は余りに生活的自立ができていない為に、主婦が背負い込んでいる部分がありますね。

本来個人がすること、背負い込んでいる部分と、分けて考えてゆきましょう。

それから自立できない人間を支えてゆく労働。これは子どもを育てたり、老人、病人を抱えている場合ですね。

これは個人の自立の問題では済まされないでしょう。誰かが支えてゆかなくてはならない労働で、社会的に広がりをもつ労働だと思いますね。誰が交えてもいいのですが、今はその「誰か」を考えることなく、主婦に負わされてしまってますね。

これは本来経済的に評価されるべきだと思いますね。

身のまわりの世話の延長でやっている労働は、評価できる性質のものじゃないし、亭主のやることを背負い込んでいるのは、こんな亭主にツケを廻すべきなのよ。

先日ある会合の後、主婦の方から「樋口さんは主婦の家事労働を評価しないと云われたのですか」と電話で抗議があったの。

その件は全くの誤解ということがお互いに直ぐわかったのですが、そういう反論が良く出る時にもうひとつの側面からいうと、現実には主婦だけが背負っているPTA活動とか、消費者運動とか諸もろの地域運動、もちろん男も参加していますが、やっぱり70年前後から、様ざまの批判はあるけれど、振れすぎた社会の軸を元に戻そうとする運動は、主婦が背負う役目を果たしているでしょう。

それを認めないんですか!! と主婦の方

ちは怒るけど、私はもちろん認めますが、それを家事労働として認めることは違うんじゃないか、と思うんです。

唯、問題は男の人がやっていない、意識に入っていないことの方がおかしいんでね、女にとって悪い公害は男にとっても同じでしょ。

何故男が参加できないか、男がそういう発想ができないことの方が問題で、主婦の家事労働を評価するよりも、何もできない男を批判するべきではないか、と思います。

男が家事労働が出来ないことと関連して、今の日本社会の労働条件は、“男に家事専業妻がいる”ことを前提とした労働条件ですね。

“日本の男は職業だけに生きる”ものとして、人間としてアンバランスな生き方なのね。

そこへ、子どもも生まれました、家事もやっている、という全く人間としての女が出てくるんですからね、うまくゆかないのは当然なの。

職場の労働条件は、家事を妻に負わせている男の為のものだということ、そのあたりから考えなくてはならないですね。

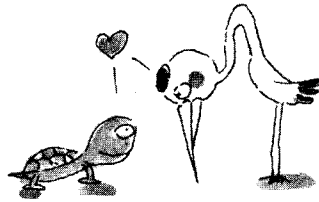
それからさっき出たんですが、電話番号を含めて、主婦が家にいることを前提として社会の仕組みがありますね。

書留が来れば印を持って出る、それからたとえばゴミ収集。

欧州の或る国ではゴミ収集は夜中に来てバ

ケツはきれいに洗って門の前に返してあるそうですね。そのことだけでも税金を払っている価値があるという話を読んだことがあるけれど、この話と日本とは雲泥の差ね。

ポリバケツは共働きでも出せるけど、取り込めないでしょ。家庭に主婦が居るもの、留守番してるものとして社会が仕組まれていることは頭に来ちゃう人も多いですよ。



“行政の下請け”を主婦がやらされている、卑近な例を出せば団地の階段の掃除とかね、世の中をまわすための下請けを知らん間に主婦に冠せてしまっている訳ね、誰も何とも云わないうちに。

日本の主婦はもっと税金を還元してもらってもいいんじゃないかしら。

この部分の家事は経済評価できませんね。

30年頃から婦人雑誌を中心としたホームジャーナリズムで、“家事と家政を切り離そう”。

主婦はホームマネージャーである。家事は人に任せられるが、家政は任せられない”という風潮が出たの。

でも、何故、家政が妻にかかってくるのか、私にはわからない。

私の家のように共同生活のような夫婦でも、やっぱり献立を決め、買物をし、調理するのは主として私にかかってくるの。

勿論、私の亭主も料理だってうまいし、エプロン姿で人前に出ることを少しも恥かしがらないのよ。それでも家政の部分は常に私にかかってくる。

専業主婦の方は家政は妻が当り前になっているかもしれないけど、家政をやる人、イコール権力者じゃないんですよ。

マネージャーであって、あくまでもオーナーじゃないんですよ。

地位と役割の差ですね、これが。

次に最後ですが、“家事と愛情の関係”ね。

「あなたは配偶者に何を求めるかという数年前の統計があるの。それによると

夫は、「炊事、洗濯、調理」を求め、

妻は、「給料をちゃんと入れること」を求める。

それで夫婦の愛情のあり方なんだけど、日

本では「家」という意識と「役割分担をきちんとやっているか」ということなのね。

その証拠が、外国で単身赴任を三年もしたらまず離婚ね。ところが日本じゃ離婚どころか、かえって新鮮なんて云ってる。(笑)

夫の側からみた妻への愛情の表現は、キスするでもない、(笑) などでたりさすったりするでもない、給料袋を黙って渡すこと、これに尽きるのね。

妻の側からみた夫への愛情は、離れていても細ごまど気をつかってくれるとか、一緒にいれば家事を一生懸命やることで、夫からいえば、「家事はまさに自分への尊重、愛情の証」なんでね、だから妻が家事を合理化することを夫は割り切れないのね。

司会 家事を経済的に評価する方法というのはあるでしょうか。

樋口 先の話に出た自立できない人を支える労働は社会保障で払うべきだと思いますね。

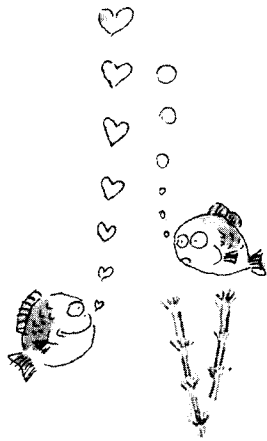
例えば今度、育児休職は無給になるという動きがあるけど、あれは女が家庭で子どもを見るのはタダだという意識があるからですね。外で働く為に子どもを預けると保育料を払うんですからね、育児休職は社会保障としてきちんと払っていくべきですね。

一人のお年寄りをみるのも大変ですよ。能勢 人を庸えは私の経験でも月二十万です。でも夫はそれを「家政婦は高い」としか見

ないんですね。女の家事がどの位にあたるか考えようとしないうですね。保育所、お手伝いを合わせると家事労働が如何に高いかということが身にしみてわかりました。

しかも決して易しいものじゃない。

夫が大病すれば、栄養生理学の分野で調理するし、公害といえは化学やら政治知識などいい加減に出来ないことが家庭に及んでいますね。昔と比べて家事は数段複雑でしょ、でも男性は昔のままでノホホンとしているから、



家事なんて何とも思わない。妻が病氣して人を頼んで初めてその高さがわかる程度。

林 そうですね。私も疲れがひどくて夜ちよ

っと一寝入りしないと後が続かない。その様子を娘が見ていて結婚したくないって……

平岡 娘は私を半面教師とみているの。

自分はお菓子を焼いたり、家をきれいにし

◆ 分担と手伝いと

能勢 「他所のお母さんは勤めていても、お菓子を焼いたりする。家事をお母さんがやるのは当然」とハッキリ子どもが云ったのよ。

それと夫が「協力力はするしオレはやっている。しかし、これは本来女の仕事だ」と云ったの。二十六年間私の生き方を理解してくれている、支持してくれていると思っていたのに、この程度だったのかと愕然としました。今まで分担でやってきたのは全く私の一人よがりだったことになりましたね。

そこで家族で分担か手伝いか、ということが問題になって、いろいろありました。

とにかく現在は役割を話し合いで決めて、日曜日に全員が二時間ずつ努力を出し合って家事を解決することになったのね。

滝沢 家事をどう考えるかということでは階層の違いを感じますね。今は夫と分担してやらなければどうしようもないところがありますからね。私に用があれば、風呂、洗濯、子どもの食事から全部やらしてもらわねばならないですから。夫も時間が不規則な仕事ですからお願いできないこともあります。

平岡 「やってもらう」という意識はどうかしら？ うまくいっている時はいいけど。

家庭によってやり方は違うけど、やってくるという意識が育った時に、やはり家事は女の仕事だ、という気持ちが出ないかしらね。滝沢 子どもが小さい時は大へんだったけれど、でも手作りでもやりました。着る物も食物も。だから勿論忙しい。家事の量はほぼ半分ですつ分担しました。私が忙しければ夫、その逆の場合、どちらでもよかったの。

子どもも三才になればその年令なりの手伝いをさせるようにして……

能勢 二人の間に共感があれば何も問題はないわね。

やり方は各家庭によって、生活に応じていろいろある。夫婦に共感があれば、それだけで大抵うまくゆきますね。

ところが、事情が変わり共感がもてなくなったり、意外に今まで無意識にやっていた事が問題になってくる。

「やってみよう」ってなんでもない意識が、やはり家事は女の仕事だっていう、社会の機構にはまり込んで行く。

樋口 社会機構の変革なんて、口では簡単に言えるけど、一つのことを変えるだけでも大変なことよ。

定年を五年延ばすだけでもすごい努力よ。理想の世界は、はっきりしているけど……

寺岡 現実は今、出るに出不れない主婦がいかに多いか。養われていると言う意識、経済力

が無い、職場が無い、そう言うことをひくめてどうしようもない主婦が沢山いる。

今ここにいる方は、それぞれ自分の仕事をもっているし、自分の家庭だけでは、それほど問題はないし、問題があってもそれをより良く変えている。

でもね、仕事をもって外に飛び出しても、私はどうしても主婦という事を考えざるを得ない……

樋口 家の中だけを変えたって、変らないと思いますよ。例えば職場で女の若年停年制なんがある職場が今でも三〇%ぐらいある。女が結婚したり出産したりすると仕事をやめねばならぬ職場が堂々とまかり通っている。

これを変えていくだけだって、ものすごく大変。でも変わらなければどうしようもない。職場の三分の一は女性だ、六割は既婚者だと云っても、現実には女はそこにはいないものとして考えられているんですよ。女の労働は社会労働ではお手伝いに過ぎないんですよ。分担していないんですよ。

だから夫が家庭に入れば、夫の家事はお手伝いにすぎない。家事の分担はしていない。

だから「作る人、食べる人」なんてのは全くそのあたりのことを云っているんですよ。

平岡 家庭に専業主婦が沢山いるために、女の労働賃金が低いうて云う人がいるけど、専業主婦の側から云えば、女を家に置いといても

タダではない、けっして安くはないんだと認めさせれば女性労働者の賃金もあがるのじゃないかしら。

樋口 主婦の賃金を払うというような形じゃ、絶対今の企業は認めませんよ。

司会 もしやっとなしたら、女は主婦になった方がトクだって家事の方をとるでしょうね。かせぎのよさそうな男性をつかまえて結婚するのが、一番手取ばやくとくをする生きかただということになって、ますます家庭に閉じこめることになるんじゃないんですか。

樋口 だから私は女性労働者の賃金を上げる方が先だと思えますよ。

林 そうは云っても、私なんか果してどういう仕事につけるのか——十何年も専業主婦でしたから……

そこで趣味的な事を家庭でしながら収入を得ようとする、プライドの高い夫が反対するし嫌がるんですよ。

能勢 夫がいる時は仕方ないけど（笑）いつかはなくなるんですよ。社会の変革と同時に自分のことも含めて急に変えることはむづかしいんだから、いろんなことを考えておくことは大切ですね。

将来の展望ですけど、私は男の子二人を、「男女平等の精神」に育てあげようと思えます。それが今まで私が受けたダメージへの答ですね。

（まとめ・宮城）

法律から見た家事

——中島通子さんに聞く——

家庭が平和であれば、法律の出る幕がないので、わたしたちは平常法律のことなんか、知りもせずですけれど、ほんとにそれでいいのでしょうか？ わたしたちの生活に、法律の影響は及んでいないのか。または法律を知っていたら、もっとかしこい生き方ができるのではないか。女性の地位向上のために活躍の、弁護士中島通子さんに、お話をうかがってみました。

——わたくしども女は、結婚すると家事をすることになります。ほかにする人があるかもしれませんから、好きでもきらいでもそうなるほかないのが現状ですが、女が結婚したら家事をするというのは、法律的になにか根拠がありますのでしょうか？

■それは、そういうふうには決まってるわけですね。ただ法律では、夫婦は互いに助けあうというきまりになってるわけなんですよ。夫婦は同居し、互いに協力し、扶助しなければならぬ。協力扶助義務っていうんですけれどね。民法の七五二条です。

もう一つは、これは夫婦財産制の中に入りますけれど、婚姻費用の分担、つまり結婚生活の中の生活費ね。

民法七六〇条、「夫婦はその資産・収入その他一さいの事情を考慮して、婚姻から生ずる費用を分担する。」となっているの。

この二つが、夫婦が一しょに暮していく上での一ばん具体的な義務みたいになってくるんですけれどね。どっちがお金を出して、どっちが家事をするというところは書いてないわけなんです。生活費の負担は夫がし、家事を妻がやるというのは、これはもう、社会通念なんですね。社会通念として、この考え方が非常に強くあります。現実には。

法律そのものには書いてなくても、法律の中

味を解釈するのは、社会通念だっていわれているので、夫は生活費、妻は家事、という通念によって、裁判官が夫婦間の問題を考え、判断するんですね。

——そうなりますと、たとえば奥さんが家事をちゃんとやらなかったりすると、それが離婚の理由になるでしょうか。

■離婚というような問題が起きてきた場合には、夫のほうはぜんぜん働かない、生活費入れない、なんていうのは、かなり悪い夫だってことになるすね。

逆に妻の場合、家事をやらない、ということがもう最大のね、離婚理由……離婚理由としていちばん言われるのはそれで。

ただし、決定的なことは、奥さんに不貞行為があったとかがいちばん大きい。不貞行為はもちろん夫の場合でも大きいですよ。そして夫のほうの数からいえばずっと多いですが、妻のほうはそれを除けば、いわれるのはもう、家事をしない、家事がおろそかである、ということですね。

——働いている奥さんなどですと、ある程度家事の手抜きをしなければ、やれるものじゃないと思いますが、オロソカにする理由は問題になりますのでしょうか？

■働いているからということが、どういうふう
に評価されるかといいますとね、具体的、たとえば調停（家庭裁判所の調停）の場で調停委

員なんか判断するのは、働く理由です……夫が反対してにもかかわらず、働いて、そのために家事がおろそかになるというんだったら、これは妻としての基本的義務をはたしていない……、という考え……これはかなり強いんですね。しかし生活のためにやむを得ず働いているとすれば、それは多少夫だって、我慢してやらなければならぬ。我慢する、ということ、すすんで家事に協力しない、なんて一言もいわないです。大目にみてやるという考えたわね。これは一九七五年の、家庭裁判所の中で出ている「ケース研究」という本ですが、ここに家庭裁判所の裁判官が、論文を書いているのね。「判例から見た夫婦の協力義務」という論文です。これでは、家事労働に従事するのが婚姻共同生活における、妻の基本的義務である、といっています。その根拠としては、旧ドイツ民法とか、現フランス法とかを持ち出していてね。改正前のドイツ民法にはこんなふう書いてあるんですね。

「妻は共同の家事を管理する権利を有し、義務を負う。妻は夫婦の生活関係において、その行動が通常とされる限り、家事および夫の営業上の労働を行なう義務がある。」

つまり夫は生活費、妻は家事労働、または夫の営業に対する協力……こういうものが、古いヨーロッパの法律の中にはあるわけですね。それを持ち出してきて……フランスのは現在

も生きてる法律ですが、ナポレオンのころにできたものですからね。（笑） こういう古い法律と、さっき言った社会通念でもって、日本の民法を解釈して、家事労働は妻の婚姻生活における基本的義務である、とくるわけよ。その論文では、共稼ぎについてもちょっとふれているんです。

「共稼ぎの目的が、家事労働からの解放による精神生活向上にある場合」

——家事労働から解放されれば、精神生活が向上するってことは、認めているわけですか？（笑）

■「妻が社会的に高い地位にあり、高い収入がある場合などでは、代替的家事労働のほとんどを女中・家政婦にまかせ、その雇用費用を負担するという方法によることになるであろう。」というのね。ところが共稼ぎの目的が、「物質的経済的な生活水準の向上にある場合」、たとえば「居住用土地、家屋、家具・家財等の購入資金を得る目的のときは、できるだけ預金し、生活費は切り詰められるであろうから、妻の家事労働は軽減されない。双方が困苦耐乏の生活を余儀なくされるであろう。」なんていうふうになっているのね。働いていても、妻の家事労働は軽減されないといい、夫が家事がおろそかであるといって、非難の材料にし離婚の理由にした場合にも、経済的理由で、あんたも認めて働かしているんだから、がまんしなさい、という

までなのね。協力しなさいなんていわない。なぜなら、家事労働は妻の基本的義務だから。

——法律というのはそういうものなんですか。社会通念によって解釈されてしまう……。

■まったく、調停委員の考えというのは、見ておどろいちゃうことがあるんですよ。

夫が賛成しないのに、妻が働いてる場合だったらね、「あなた、食べていけるのに、家事労働をおろそかにしてまで、働くというのはあなたがいけないんだから、勤めをやめなさい。」——こういいますよ。

——おどろきましたね……、家事がオロソカで、妻君のほうが悪いってことになって離婚したら、財産の分与なんてものも、不利でしよう？

■財産分与とは何か、についてのね、規定が非常にはっきりしてないものですからね。調停の場では財産分与としていくら、慰謝料としていくら、というふうにしないで、とにかく別れる話をまとめるためにいくら出さない、出しましようというように形で決まるわけよ。ですから金額的にも非常に少い額で決まってしまうんです。

——すいぶん、家事をちゃんとやってなかったということが、女にとって不利なんですね。そうなると、そこらに離婚されそうなん、いっぱいいるけど……。(笑)

——ただ病気で家事ができないっていうのは、

これはしかたありませんでしょう。

■でも、病気で家事ができないというのも、それなりに妻の義務を果たしていないことにはなりますよね。もちろん病気を理由に離婚はできませんが……精神病で、回復の見込みがない場合以外にはね。しかし、なにかの病気でかなり長く入院していると、そういう場合は、立場としては弱くなりますね。

——ひどい社会通念ですね。では、その法律解釈のもとになる、社会通念が変ればどうでしょう。今かなり変わってきてないでしょうか。

■さあ……変わってきてるかどうか、議論のあるところじゃないですか。わたしたちが声を大きくして、女の立場を守らなければならぬということは、変っていないからでしょう。

なにしろ、妻の基本的義務は家事労働であるという、これをこわさないと、いくら家事を高く評価してもらったって、どうしようもないんですよ。共稼ぎの場合でも、家事労働がおろそかなら、いくら働いてもためだ、むしろ働くことそのものが否定されてしまうでしょう。

家事労働が基本的義務である限り、女は一人前には働けませんよね。そうして家庭に入ってしまうと、その期間が長ければ長いほど、再就職はむずかしくなるわけで、再就職できたとしても一人前の賃金は得られないんですね。つまり家庭に閉じこもってしまえば、所得能力……外で働いて収入を得る能力……はだんだん、失

われてしまうのね。そのために離婚まではいかなくても、離婚よりもっとわるい、みじめな不幸な状態で、がまんして暮している妻がどれほど多いか。わたしは職業柄、そういう人たちと日ごろ接しているものだから、ほんとに所得能力を失えば女はみじめだってことを、痛感しているんですよ。

——こういう状態を、一挙にかえることは不可能ですから、現実には、所得能力を失わされてしまっている、家庭の妻に対して、それはそれなりの保護も現在のところ必要ですね。

——夫に財産があれば……離婚後も扶養してもらえないでしょ？

■いいえ、日本ではその考えは殆どありません。これは結婚が家と家との取決めであった頃は、離婚すれば実家へ帰る、夫の家から親の家へ移って実家が扶養することになるのね。その考え方が現在まで影響しているのですね。

——やっぱり、女の役割が家事であるという、社会通念に問題があるんですね。——という家事をあんまりさばれば、離婚されるおそれがあるし、夫の同意がないと働きもできない……。

■まあ、一つの方法としては、現在のところではですよ、夫と話し合いで、贈与税をとられない範囲（年額六十万円まで無税）で、貯金を妻名義でしておくのもよいでしょう。離婚資金を貯める……。(笑)

——今日はいろいろ教えていただきました。

(まとも・和田)

おかず材料配達会社



——家事の社会化の方向をさぐる——



和田 好子

わたくしたちがいつも追いまわされてあくせくしている家事の中でも、とりわけ荷が重く感ずることがあるのは、食事づくりではないでしょうか？ 食事というものは、毎日まいにち、朝昼晩とたべるもので、これはもう、手の抜きようがない。逃げることができないから、ときどき息が詰まるというのが正直なところでしょう。

魔法のテーブルかけというのが、童話に出てきます。そのテーブルかけを食卓にひろげさえすれば、あったかいスープや、おいしい焼肉や、お菓子や飲物や……つまり食事一式がこつせんとあらわれる……。

そんなテーブルかけ、とまでは行かないけれど、家へ帰ってみると、玄関口に冷蔵庫がおいであって、中に今夜の料理の材料が、ひとそろい入れておいてあり、あらかじめ配られている献立表を見れば、作り方が書いてあって、その通り作ればよい。そういうおかず材料配達会社があるのです。

タイヘイ株式会社……本社は千葉県八日市場にあって、「集団給食の総合商社」と称しています。東京江戸川区松江に本部があるので、訪問していろいろ質問をしてみました。

——こちらは給食会社だということですが、どういふところへ給食を？

「うちは集団給食の材料を入れるんです。はじめは建築現場……いわゆる飯場ですね。ああ



いうところで、給食係におばさんなんか雇ってきても、栄養の知識はない、調理の仕方よく分らず、材料の仕入れもむずかしい。いろいろ困るわけなんです。そこで献立を栄養士につくらせ、材料をそろえ、作り方つきで配達したところ、これは便利だというのでどんどん業績が伸びました。それから工場や会社へも配達するようになり、四十八年から、一般家庭を対象にした「ファミリー・セット」を始めたんです」

——軒一軒じゃたいへんでしょう？ やはり団地など、集合住宅が対象ですか。

「いやいや、どちらへでもうかがいます。営業所は全国的に、たくさんありますから」

——やはり共働きのご家庭などが、多いのじやありませんか。

「そうでもないですね。まあ一般のご家庭ですよ。わりとお若い奥さんのお宅が多いように思います」

——このごろの若い奥さんは、お料理を知らずに結婚する人が多いらしいから、そのためでしょうかね。

「そうかもしれません。献立表に作り方がついていまして、そのとおり作れば誰でもできますから」

会社が強調するのは、便利さとか手が省ける

というより、材料が大量仕入れで新鮮であり、やすいということなのです。野菜は直営農場から、肉や魚も産地で仕入れる。夕食四人前のセットが八五〇円、昼食は六五〇円です。

献立表をみると、

ピースごはん 豚バラ肉と野菜のたき合せ

甘塩マスと白菜の粕煮

といった具合で、なかなかおいしそうです。

食品添加物にも注意して、有害なものは一切使わないようにしているとのこと、ヨサそうだなア、という感じを受けて帰ってきましたが……。

ともかくも、試してみなくては、と、編集部
の田中さんが申し込んで食べてみることにしました。

田中さんは料理の味付けなどは上手で、腕はわるくないのに、たいへんめんどうがる人で、「めんどくさいことするくらいなら、食べずにいる。」というくらいだから、

「よかったら、これからも続けてとるわ。」と、かなり期待が大きかったようです。

四、五日して電話がかかってきました。

「ちょいと、あれやっぱりためたわ。」

「なぜ？」

「どうも手がかかるわりに、まずそうな献立が多いのよ。昼食用の簡単



な献立のほうがかえっていいみたい。」

なるほどよく聞いてみると、その通りで、生ザケに、長ねぎのみじん切りの入ったねり味噌をつ



け、アルミホイルにくるんで焼く、などというのは、田中さんのしたとおり、生サケをバター焼きにして、ジュッとレモンをかけて食べてしまうほうがよっぽど美味しそうです。

「カニの卵巻き蒸し」なんていうのは、薄焼き卵をつくり、豚ヒキ肉とカニをすり鉢ですり、それを巻いて蒸す。田中さんいわく、

「これならフヨーハイ作ったほうが、よっぽど簡単でおいしいわよ。」

「きゅうりとくらげの白和え」は、きゅうりを薄切りにし、しらたきはゆで、酒、しょうゆをふりかけて空炒りし、くらげは塩出ししてもどし、ぬるま湯につけ、酢、しょうゆで下味をつける。トーフはくすしてゆで、ザルに布巾をしてあげ、水気をしぼる。そして具を和える、

とくるので、田中さんはとてもやる気がせず、「きゅうりとくらげはお酢のものにして、おトーフは冷奴にして、そのまま食べちゃった」

かくして実験一週間、ヤッパリ断った、という結果に終わりました。

ちよっと考えてみると、こうした傾向の手のかかるわりにおいしい料理が、意外に婦人

雑誌のグラビアやテレビの料理番組にきわんでいることがわかります。基本的な料理の上に、変化をつけようとするれば、どうしてもこういうことになり、またそれが、いわゆる料理らしい料理として受けとめられているのではないのでしょうか。「ファミリースセット」の献立も、その影響をうけているのかもしれない。

家事は衣服にみるように、企業の利益につながった場合、たちまち産業化され社会化されて家庭からとりあげられてしまうものようです。料理も、機織りや裁縫と同じ運命をたどるのでしょうか。それが女の自立につながり、新しい可能性をのばすものならば、けっこうなことと云えましようが、しかし料理の社会化には、まだいろいろな角度から問題になる点が多そうです。

食生活での好みの差、予算の多寡、調理にかける手間、大食か少食かなど、家庭によって条件がさまざまにちがいます。

複雑化しすぎた日本の食生活のありかたは、考えなおす必要がありますが、料理の社会化は、おかず材料の配給だけでなく、まだ、いろんな方法があってもよいのではないのでしょうか。



入場者一六、〇〇〇人

第二回「消費者から見た欠陥商品展」

寺田かつ子



「消費者から見た欠陥商品展」第二回を開催したのは四月三日から五日の三日間、新宿の地下街サブナードであった。

欠陥商品という言葉に対して業者はピンピンとひびくらしく、昨年も今年も、うちのは欠陥ではないとくいく下る業者が何人もあった。しかし昨年より今年、業者も消費者も成長したとはいえないだろうか。

欠陥商品。と一口に言っても、その解釈はそれぞれ違う。「消費者から見た欠陥商品展」と言ったのは、業者が言う欠陥とはいささか意味を異にしているということである。

構造的な欠陥、事故をおこす恐れのある商品、法によって規制されているもの、それらが欠陥商品というのは当然のことであるが、それ以外にも、消費者が使ってみて不便を感じているもの、買っただけで

り、何度か修理しても完全に使えなかったり、便利さを考えるあまり安全性がおろそかになっているもの、その他考え方の違いのあるものなど「消費者から見た欠陥」は数多い。

これらの欠陥商品が一挙になくなるということはまず考えられないにしても、これをそのまま放置してよいとは言えない。食品、食品容器、日用品、繊維、耐久消費材、過剰包装、役務、改良品などの各コーナーに並べられた商品は約三百点、コーナーでは係の人達によって參觀者に説明される。

「あら、これはうちにもあるわ、うちのは大丈夫かしら」

「いやね、こうして見てくると、食べるものはないみたいね」

「やっぱり色のついた物を買うのはよそう」

各所で様々な声が上っている。

こうしてまのあたりに見ると成程と思うと參觀者の話にもあったが、消費者自身も、もう一度まわりを見回してみる必要がある。自分が使ってみてどうもうまいかなかったり、小さくても事故が起ったり、疑問があった時、これを見逃してはいないだろうか。そういう時に一体どういう処置をとっているのだろうか。

当日参観者から頂いたアンケートによると、回答者の中で六〇%の人が何等かの欠陥商品を買った経験をもっていて、そのうち五五%はあきらめている。消費者センターに持ち込んだのはわずかに六%であった。

メーカーが製作する品物は一つ一つ欠陥商品であってはいけない。その為に研究され、検査されて市場に送り出されていると思うが、その中にやはり「消費者から見た欠陥商品」が存在している。「その欠陥商品は一体いつあったのか」と詰めよる業者もあったが、製造する側からすれば、千個一万個のうちの一つ、千分の一、一万分の一であっても、消費者は一つ買った一つが欠陥というのは百%ということである。

以前は「安いものだから」とか「安く買ったのだから」というあきらめが多かった。しかしそれは理由にはならない。何か欠けている所があるから安いのであれば、それははっきりと表示されるべきである。納得した上でならそれは欠陥と言えないかもしれないが、知らないで買わされたとしたら、それは騙されたわけで、明らかに欠陥取引で公正な取引とはいえない。

欠陥商品をなくす為には、メーカーも消費者も、そしてその間にある販売業者も、もっと厳しい目で商品を見つめなくてはならない。欠陥商品は誰かがなくしてくれるものではなく、自分でなくしていかななくてはならない。

先に、業者も消費者も成長したとはいえないだろうか、と書いたが、昨年第一回の展示を行ってから今年までに改善されたものも幾つかある。「改善コーナーが少いのは何故か」とよく質問をうける。これは私たちの後追いの努力も足りなかったのだと思うが、業界もなかなかすぐに改善というわけにはいかないようだし、出品されたものの中には、どこの製品かもわからないものもあり、研究の為に持ち帰られたものは分解されて元のがなくなってしまうものもあって、改善品コーナーはあの程度になってしまった。しかし今年は会場へ見に来られたメーカーの方々が

うちのはこう改善しましたと会場に持ち込まれたものもあった。

主旨の中でも言ったが「『欠陥』をあげて皆様に注意を喚起すると共に、メーカーの方々とはこれを手がかりに話し合い、より良いものが作られるよう問題提起」をしたわけで、その後にもった話し合いの機会にも三〇社五〇名近いメーカー流通業者などの出席を得て懇談をしたが、これ一回で事足りりとは思っていない。

「消費者から見た欠陥商品展」を開いたから、すぐ業界の考え方がかわると思えないが、今迄のように業者と消費者は完全に対立した関係にという空気は徐々にではあるがかわりつつある事も事実である。私たち自身も決して無理をせず、時間をかけてじっくりと話し合いたいと思う。一つの物が改良されていくというのはいい事だ、それだけの道程が必要だとは思いますが、やはりそれも適切な時間でなくてはならない。大量生産、大量消費の時代が去った今、物は如何に作られ、如何に運ばれ、如何に売られ、如何に使われるかをそれぞれみんながよく考え、最もよい状態で最後まで努力を惜しまないようにしなければと思う。

昔は物を作った人が販売もしていた。そこで使う人が誰かもわかっていたが、今はどこの誰が作った物かということも、自分の作った物が一体どこの誰に使われるのかということもわからない。そこに「物」が大切に扱われない原因の一要素がひそんでいるのではないかと思うが、消費者がその姿勢をかえることによって、業界の姿勢もかわるのではないかと思う。もともとあってはならない欠陥商品ではあるが、これが市場から消えるには双方の努力が必要であらう。

消費者から見た欠陥商品展は、約三百点の展示をしたが、各コーナー毎に追っていくと、

食品ではまず「色素」である。着色された加工食品を買うのはやめようという訴えである。少し前問題になった「赤色一〇四」「赤色二号」などは勿論、それ以外のものもタール系色素は安全とはいえないし、

誤魔化しの為に使われる事も多い。このような色素が私たちの生活に必要なだろうか。色素のついでに、食物ではないが、口の中に入ると考えられる口紅には、食品に許可されているよりもっと安全性については心配なものが使われていることも知らなくてはならない。

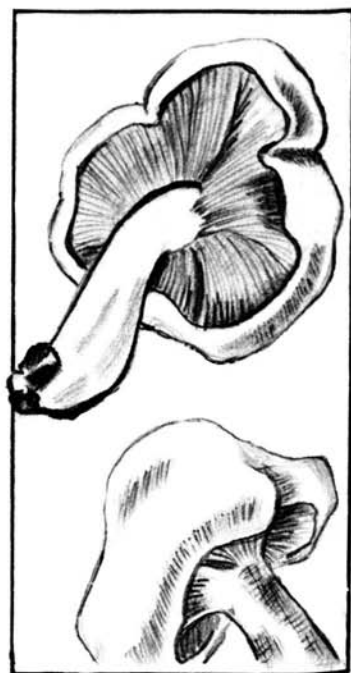
食品容器ではプラスチック類が沢山並んでいた。フタル酸エステルや塩ビモノマーの害が叫ばれ、急速に私達の生活の中に広がったこの容器の安全性に疑問が投げかけられているが、素材が何で作られているのか、添加物に何が使われているのかわからない、安全かどうかかわからない。疑わしきは使わず、とに角、食品容器にはプラスチック類は使いたくないというのが私たちの主張である。これらは法の上では使ってもいいことになっているが、私たちは「使いたくない」というものである。

日用品では、頭が重くてひとりでは立てないフロアスタンド、お湯が早くさめる魔法瓶、二、三回の使用で水が入る靴、五回位履いたら底が切れた婦人靴、鉛の出る陶器、蛍光剤を検出したトイレットペーパー。

「油は冷えてから入れて下さい」と書かれている油こし、そして、プラスチック製の製品が燃えた時大量に出る一酸化炭素は焼死の原因を作り出しているのではないかと問題提起。

繊維では外国製のコートで、ドライクリーニングもできない、全く使いたげの物、ブルには入れない（漂白不可）という水着。洗濯で色が落ちたセーター、蛍光剤使用のよたれかけ、木綿糸、ふきん、ハンカチ。伸縮性のない布地使用のスキーズボン。

耐久消費材では、ブレーキの構造のせいか走っていて急にブレーキのかかる自転車、強の方が中より弱い電熱器、御飯が黄色くなる電子ジャー、霜取不良や内部が焼けた冷蔵庫。ガスもれするガス管、スチームの出ないスチームアイロン。しかしこれらを扱う上で注意しなければならぬのは男性が説明書を読んで実際に使うのは女性というような事では適切な使い方はできない。消費者も又機械器具はよく理解してから使用すべきである。



過剰包装もまた欠陥である。価格面からいっても資源の面からいっても無駄だということ、私たちとしては、四七年からの取組みであり、それ以前からも取組んでいた仲間は沢山あるのに、なかなかかはかばかしい成果が上がらない。贈答品などを選ぶ時、みんながよく気をつけて過剰包装でないものを選ぶことが、過剰包装追放の第一歩であり、ゴールでもあろう。売られなければならないものである。

役務のコナーには「サービス」「形のない買物」の展示であった。保険、銀行から美容、理容、クリーニング、デパート、企業の消費者窓口、ガソリン、化粧品、ガスそして資格講習等、様々な問題が出ていた。資格講習もどこを選べばいいのかと、何本かの電話が入った。

改良品は少なかつたけれど光っていた。底がすぐに破れるもう少しもってこれなければというおかあさん達の声が高まり、強く手頃な値段の運動靴ができてきたり、同じ三本入りでも六、七センチも小さくなった贈答箱、同じ五個入りの石けん箱の小さくなったもの、着色をやめた漬物、回収も九〇%までになったというカドニカライトなどで、来年度の欠陥商品展にはこのコナーが最も広くなるようになってはと思う。

そのための努力がこれから一年双方で開始されることであらう。

（東京都地域消費者団体連絡会代表）

消費者運動のなかから

八王子市

伊牟田嘉子

この私の住む八王子市の郊外、みつい台に、みつい台消費者グループが結成されたのは、一昨年の秋だった。私が、八王子市の消費生活モニターをしていたため、一応、世話人となり、いろいろ——食品添加物、品質表示、合成洗剤などと、多種多様のテーマをとりあげ、勉強会などを開いてきた。また、最近では、天然酵母のパン作りの講習会を開催し、多くの人の共感を得た。

また、さる四月二日、南新宿ビルで開催された生活をまもる都民集会に出席し、このほど制定された消費生活条例について聴く機会を得たが、消費者の権利も、今迄の、ケネディ教書からの「安全である権利」「知る権利」「選択する権利」「意見が反映される権利」から

一、生命及び健康を侵されない権利

一、適正な表示を行わせる権利

一、不当に受けた被害から、公正かつ速やかに救済される権利

一、必要とする情報を速やかに提供される権利

になり、より密度が高まったといえよう。

しかし、それを真に私たちのものとするには、私たちの「不断の努力」が、そこになければならないと思う。

運動を一步一步前進させるなかで、消費者が自らの権利をまもるよう日々の積み重ねが重要だと思う。また、私は三多摩市民生活協同組合の、共同購入にも参加し、より安く、より安全な食品その他物資を求めている。そして、無添加の安全食品を食卓にのせることによって、家族の（わが家は夫のみであるが）健康を保持していきたいと思っている。消費者の権利は自らの手で守られなければならない。

「手をつなぎ、皆でまもう消費者の権利」

食 品 情 報

欠陥商品展に出品された食品の中から、どこにでも売っており、日常何気なく口にいっているものを取りあげてみよう。

●こんべいとう、ゼリービーンズ（春日井製菓等）マールチョコ（松風屋等）輸入キャンディ、ガム（ワーナーランバード等）おつまみ（大丸食品等）いずれも着色料、合成甘味料、保存料などが使われている。●赤や緑、黄色など、一見して毒々しい色のものは避けたほうが無難。

●しば漬（中川漬物等）大根桜漬（岩下食品等）梅干（神尾食品等）紅しょうが、からし漬（忠勇等）はりはり漬（天長商店等）。いずれも保存料使用。福神漬（東海漬物等）たくあん（東京たくあん等）山ごぼうみそ漬（西尾食品等）着色料使用。合成の味、人工の色になれているわたしたちの目や舌にとって、自然の味、自然の色はもうもの足りなくなっている。あざやかな桜色、緑色などが自然のままではあり得ないことを、もう一度考え直してみたい。

情報を具体的なものにするために、メーカー名をあげたが、同傾向の商品を製造している他のメーカーも多いこと、また、挙げられたメーカーの製品がみな、欠陥品ではないことを念頭においていただきたいと思う。

●改良された製品

天長商店の漬物、無着色。武田薬品の菓も、着色料をぬく方向へ。月星、日本ゴムの運動くつ、底を改良。

昨年の欠陥商品展から一年、改良品が数点で、まことに淋しい。欠陥を指摘されても、売れる限りは容易に改良されないのが現実なのである。消費者にも責任の一端があることを、一人ひとりが自覚していくことが必要のように思われる。

（T）



或る朝

東京都

青木知子



校庭から時折り聞えていた子供たちの遊び声も、いつしかとだえてあたりに夕闇が迫っていた。

三月になったとはいえ、冬の名残りの冷い風が窓をカタカタと叩いている。

清水先生は静かに目を閉じると今日一日子供たちと過ごした時間の一こま一こま、その折々の小さな表情や仕ぐさを、まぶたの裏に

思い返しながらか、ほのぼのとした想の中には笑んでいた。

＊

小学校の朝は早い。一年生の担任になってからもうこの学期も終わろうとしている。学校に急ぐ。あちの道、こちの道から子供が溢れてくる。私の姿を見つけると、「おはようございます。」「おはよう。」立ち止まっておじきをする子、帽子をかぶったままビョコンと頭を下げる子、さまざまなのもいつもの通りである。

校門が見えて来た。近づくともどもの流れの中に四、五人のむらがりが見える。と、

「あっ！来た、来た」と叫び乍ら馳けて来たのは、ただし君、一郎君、美代ちゃんに道子ちゃんも

いる。私の級の子供たちである。

「どうしたの、おはよう！」

「先生！おそいなあ、あのね、あのね！」

「京子ちゃんがおはよう！って云ったんだよ」

「ほんとよ、おはよう！って云ったわよ」

「ほんとよ！せんせい、ほんとよよ！」

あとは声を揃えると「ほんとだよ！ほんとだよ！」と叫んでいる。私を取り巻くと或る子は腕を取って振り、また私の目を見上げて自分達の今云っている事を信じて欲しいと、その瞳は真実に輝いている。通り過ぎて行く上級生のいぶかるまなざしにも屈しない子供たちの声は響いていた。私は、「そう！ほんと！解ったから教室に行っていないさい」と云うと、急いで玄関に入った。

始業ベルが鳴りわたっている。

出席簿をかかえて教室へ。入口に又、数人がさわいでいる。（まだきちんと出来ないのか、他の教室に悪いのに）と思う。さっき校門で待っていた一郎君はじめ子供た

ちが寄って来て一せいに話し出す。「先生！京子ちゃんが口をきいたんだよ！」

「おはよう！って云えたの！」と、これ以上的大ニュースはないような口々である。私はうなづき、できるだけ平静に「解った！解った！」皆を席につかせて見渡しなから、

「おはよう！」「おはようございまーす」底抜けに明るい挨拶が返ってくる。それはいつもの朝であった。私は窓側の中程の席に向って「京子ちゃん！おはよう！」と云った。

級中の子供たちの目が一せいに京子ちゃんの口元に注がれた。だが、うつむいて一点を見つめている様子はいつもの通りである。一瞬、教室にシンとしたものが張りつめたが、その沈黙の時も流れてガヤガヤし始めた。誰かが、

「ほんとうなのねー」「先生だとはずかしいんだよ」「僕たちには京子ちゃん、確かに云ったよ」そして「せんせい！かくれてごらんよ」その一声に、これは名案だと思っただけ、声をはりあ

けると、口々に云い始めた。

「そうよ、先生見えない方がいい」

「かくれて！ かくれて！」と。

私はおどけて、あちこちかくれ

る所を探すふりをしながら、ヒョ

イと教卓のかげに入った。

できるだけ皆から見えないよう

にと体を縮めた。姿が見えなくな

ると、子供たちは声を揃えて、

「京子ちゃん！ おはよう！」

静かだ。私は京子ちゃんの席に近

い耳に手をかざすと、どんな音も

聞きもらすまいとしていた。と又

「京子ちゃん！ おはよう！」その

時間聞いた。つぶやいているようだ

が、低い声が確かに「おはよう」

と云ったのだ。京子ちゃんの声。

いつも飛びあがらんばかりに明る

い一年生たちのそれとは程違い、

小さな、自信なげな声だったが、

初めての声、言葉だった。

子供たちは勝ち誇ったように、

嬉しげにワーッとさわき出した。

どんな様子で、どんな表情でと思

うと、教卓のかげで私はじーんと

胸が熱くなって来て、ほほに涙が

流れた。

入学以来自閉症児の京子ちゃん

はひとことも話さなかった。只、

うつむいて一点を見つめているだ

けだった。勉強も解っているのか、

いないのかそれも反応がなかった。

テストの用紙もいつも白紙のまま、

名前すら無くて集められていた。

他の子供たちの元氣さ、出来る出

来ないは別として、打てば響くよ

うにすべてが生きて生きと返って来

るのに、一人京子ちゃん存在は

空しかった。特別学級にとの声も

あったが、黒々とした髪をきれい

に揃え、さっぱりとした服装で毎

朝きちんと席に着いている京子ち

ゃんを見ると、裏にある母親の心、

願い、祈りをひしと感じながら、

私はさりげなく皆と同じに扱って

きた。只、せめて「おはよう！」

だけは毎朝顔を見ると声をかけ

てきた。最初は気味悪がって近寄

らなかった子供たちも、近頃は遊

びの時、連れて出るようになった。

校庭でゴム段に興じている子供た

ちのそばに、しゃがんで地面を見

つめている姿が見られた。その京

子ちゃんが言葉を云った。嬉しか

った。ほっとした。と共に、こん

なにも喜んでいいる子供たちの様子

に改めて目を見開いた。それは小

さいながら自分たちと同じなかま

友達になれるようにと心を痛めて

いたのだと思うと、その純粋さ、

優しさに、また涙が流れた。やが

てそっと涙をぬぐい、かくれてい

た所から出ると、いつもの朝の授

業に取りかかったのだった。

＊

間もなく子供たちは二年生に進級する。

清水先生は引続きこの級の持上

がりか、又他の学年を持つように

なるのか解らなかった。

教師になった頃は、なじんだ子

供たちを手放すのがつらかった。

それは淋しさを通り越して、体を

千切られていくようだった。卒業

期は嫌だった。心が重かった。だ

が或る時以来、水の流れに身を任

せるように、心も月日という、時

の流れになじませて無理しないよ

うにしてきた。今度子供たちを手

放すことになっても淡々と送れる

あの明るさのままであってくれれ

ばと思う。だが今日迄、京子ちゃ

んの一点にくるとその想いも止ま

ってしまった。教師としてそ

れなりにいろいろな心を砕いてきた

が（あの子だけはぬかに釘を打っ

ているようなもの）と淋しく思え

たが、近頃は、あれでもいいのか

も知れない、そう思おうとしてい

たのだ。だが奇蹟はおきたのだ。

かすかにだったが、光の射したの

を確信した。

“そうだ”清水先生は或る想い

に驚くと、心が次第に開いて行く

のを感じた。

ハリスの食べたもの



横須賀市

蜂谷まさ子

昨年の春エリザベス女王が訪日され、女王ファッションが大方の女性の関心事になった。その折歓迎の晩餐会また女王のおかししの会食のメニューが新聞紙上を賑わした。テレビでちょっとしたぞいた

その御馳走はとても美味しそうで
コックさんはさぞ腕のふるい甲斐
があった事であろう。紙上でみる
とそれ程珍しいものという程では
ないが材料はきつと飛びきり上等
なのであろう。御客様方は皆いろ
いろの面で満足してお帰りになっ
たとの事でよかったと思う。昔々
の事であるが祖先に幕府に仕えた
人がいてペリーやハリスの事も書
き残してある。原本は内閣の文庫
に納めてあるが、写しを伯母が編
纂したものが手許にあるのでその
供応のメニューを抜書してみます。

亜墨利加使節江被下候

御料理献立書

本木地薄盤

但木地三方

上：染付唐草

中皿、かき、鯛・細作さより

絵くか生か・包かん・

酢味噌

三汁九菜

梔黒塗内朱

摺魚・腹ら子

汁そふ大根・しめじ茸・

めふか

黒塗内朱坪

くしこ

煎物 鴨作身・油いり

くわ井

正目杉曲物 ぼたん

杉重海老煮染・角半へん

木くらげ

上：染付唐草

猪口、煮物・から汁

同前

中皿 teri焼鮭

杉地紙色付

鯉子付

指身 白／＼すすき・くらげ

九年母

このあとに染付唐草の大皿が五
枚続く。梔は背切鯛、食は白米、
奈良台というのに銀燗鍋に三年酒、
とからすみ、長壱尺八寸横壱尺三
寸御樽重四重物一組というのもある。
更に御菓子。

イ、茶菓子 完瀧饅頭・新くり

河たけ

ロ、後菓子 金絲藤・紅白石酢

宇治のり

ハ、干菓子

一重

紅白・翁巻・吉野落

ニ、蒸菓子

紅あん

一重

かすてら・手肥飴・
紅茶付餅・青庭かん

芝菊まんちう

ホ、干菓子

一重

茶葉藤・紅白桐島香
人參糖・桃色黄金糖

金平糖

こんなに沢山の御菓子はおみや
げ用なのかもしれません。染付唐
草色付焼に大皿鯛とか鯛薄身、さ
より、赤貝、ふくら煮鮑、あなご、
玉子焼、紅縁取蒲鉾等々ですが、
焼魚は鮭であったなんて、ほほえ
ましく、上魚になったり下魚にさ
れたり鮭も驚いていることではし
ょう。考えてみると私たちの近頃の
食生活は蛋白が足りないの、やれ
脂肪をもっと採るようにとの指導
によって欧米式の食生活に近づい
たといわれているが（それがよい
か悪いかは別として）左記の御馳
走は大正生れの私にとっては所謂
冠婚葬祭の折のそれに似ているよ
うに思う。御菓子の類が多いのは
甘味はやはり珍味であったのでし
ょう。時折テレビや映画で外人の
日本料理の食事の様子を見るが来
航時の米人達もやはりそのように

雑感

きこちなく口に運んだのであろう。
米人達の一挙一動を不思議そうな
面持でみつめていたに違いない奉
行達の姿が目には浮ぶようである。
◎献立表は原文のため意味不明な
点もありますが御了承下さい。



横浜市

井上桂子

思い出、という言葉は私は余り
好きではない。私にとって、過去
は必ずしも美しいものでも楽しい
ものでもないからだ。無論、美し
く、空かける小鳥のように心はず
む思い出もなくはない。しかし、
ごく幼かった少女時代を除いて
その多くは暗く、悔恨と空しさを
ひきずった影法師のように切ない
ものも、どんなことも過ぎてしま
えば全て美化され、観念化され
現実との間に決して越えることの

ない断絶の壁が築かれるものなら、思い出は、空しく悔恨を重ねるだけの日々を生きてきたどんな人にとっても、こよなく美しく懐しいものとなるだろう。しかし、そのような壁は、本来美しい出来事に限って容易に築かれはしても、そうでないものには、永遠に形をなさないものようである。幼い頃の自然と大地に抱かれた心楽しい日々は、もう既に、とっくの昔に私から完全に去っていった。私の魂が人生の門の前におそるおそる立ち止まり、思索の扉を遠慮がちに叩いてみるようになってからというものの、私の前に繰り広げられた様々の出来事は、いっこうに私から離れ去る様子もなく、私はいつまでもいつまでも、過去の重い荷物をしょって歩いている。その息苦しさ、思い出という言葉に、暗いイメージを呼びおこしているのかもしれない。

つ、というより、それを踏み台にさえして、陽気でたくましく生きていくためには、一体、私には何が欠けていて、更にこの上、何が必要なかと、ふと思っただけのことである。

自分を救うのは自分しかない。それも、仕事をしなければならぬ。なる雑事でも、職業の意味でもない。自己自身に属する、自己表現につながるような何か――、そう、自己表現――、今、そのことが、せっぱつまった性急さを私に呼びおこす。

時には家族や友のやさしさが欲しいこともある。むしろ、それに飢えているような昨今の私ではある。だけど、そんなものが本当に私を立ち直らせてくれるのか。それは、ひとときの快い安心と慰めを与えてはくれるだろう。だが、決して根本から私を立ち直らせてくれるような確かなものではない、ということも私は知っている。確かなものは客体として存在するものではなく、人がそれに迫る度合に応じてあらわれる何ものかであり、迫らなければ決して現われない

い何ものかである。そういう意味で、家族に限らず、人のやさしさやぬくもりは私を生かすために、どのような力にもなり得ないのだ。その力を生み出すのは私自身の内部にある何かなのだ。ということ、私はどうやらうすすらと悟りかけてきた。

人は言うだろう。

何をそんなにいきりたっているのだ。何をそんなに自立、自立と深刻がるのだ。なぜ、ひとりで人生に立ちむかっていくなど、大それたことを考えるのだ。

私自身にもハッキリとは解っていない。非常に無駄な精神の消耗のようにも思われる。そうかも知れない。だけど、誰かが言っていたように、錆び果てるよりすり切れる方がいかに決まっている。

いたずら盛りの二人の息子を追いついて、何ものをも生み出すことのないいたわれない饒舌と喧噪の中で、ふらふらと迷っている怠け者の女が、ふと真面目な気分をおこして、つかみどころのない未来への出発をのろのろとはあれ、始めたがっているようでもある。

送料について

「わいふ」の送料は、いま一冊120円かかっています。お高いので本当に申し訳なく思っておりますが、何冊かまとめてご注文になりますと、大分割安になりますので、ご近所のかたとでも、ごいっしょにお取りいただけたら、と思います。

二冊まで120円　六冊まで160円
十冊まで200円

四人でまとめて下されば、一冊分40円の送料ですみます。ぜひ、ご利用くださいませ。

匿名投稿について

「東京の一読者より」とだけある投稿をいただきました。紙上匿名を希望される場合も、編集部にはお名前をおしらせいただく存じます。

投稿されたかた、ご連絡下さい。

誌代値上げについて
138号が出来あがって、計算してみたところ、これまでの定価では原価を割っていることがはつきりしましたので、139号から定価300円予約価250円にさせていただきます。なお値上げ以前に予約された方たちには、以前の価格でお送りいたします。よろしくお願いいたします。

編集部

私たち主婦は、なにかの会合に出ている、時計の針が四時を指せば、たいがいそわそわし出すものです。ほかでもない、家族のために夕食の仕度をしなければならぬので、これから買物をして帰って、料理をしようと思うからですね。

でもときどきは、じっくり落ちついて、話し合いや仕事を……働いている主婦だっているわけですし……すべき場合もあるでしょう。

そのとき留守をする家族のための献立を、少々ご紹介しましょう。参考になさって、いろいろ工夫してみてください。

原則として、

①前の日に作っておける。

②火を使わないで、そのまま食べられる。

③ふだんあまり作らない、珍しい料理。

④デザートを必ずつける。

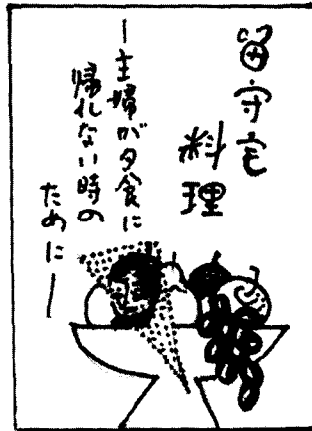
家族の誰が欠けても、食卓はさびしくなりません。いわんや主婦がいらないのは、中心がないさびしさですから、それを補うために家族が喜ぶものを用意しましょう。

おにしめ

手のかかる代表みたいに思われがちですが、材料によってはとてもかんたん。

たけのこ（ゆでたものを買う）、干しいたけ、にんじん、こんにゃく、生あけ（あつあげ）、ぜんまい（ゆでたものを買う）、青味にきぬさやとかいんげん、グリーンピースなどほんの少々。

材料を適当にきり、（干しいたけは熱湯につけるとすぐもどる）ひらたい鍋に並べ入れ、かぶるほどの水にお酒少々、こぶ一片、煮干の頭とわたをとったもの十本ほどを加えて火にかけます。煮立ったら火をほそめ、少し煮て煮干とこぶはとり除く。さとうを加え、また少し煮てから、塩少々としょうゆを加え、薄くも濃くも好みに味をつけます。そのままとき鍋をゆすって汁を全体にかけ、お煮ぞめというおとり



よい色がつくまで煮ます。これにかまぼこか卵やき（関西ならだし巻）をそえ、デザートにはくりぜんさいを。

くりぜんさい

あずきを洗って、たっぷりの水でやわらかになるまで煮ます。つぶれるほどやわらかくなったら、水が多ければ捨て、さとうを加えてなおしはらく煮てから、フォークなどでかきまわしてどろどろにし、塩をほんの少々入れる。びん

づめの甘露煮のくりを、おわんなどに数粒ずつ入れ、あずきをかけます。冷たくして食べる。あとは漬物。

次に洋風の一コースを。

天下一品酢油キャベツ

東京日本橋の、たいめい軒というレストランの名物です。

キャベツをあまりはそくないせんぎりにし、酢を控えた、コショウのきいた酢油ソースであえ、しんなりするまでおきます。それだけ。

いわしの酢漬け

いわしの生きのよいのを三枚におろし、骨の部分はきれいにすきとり（中骨はとりません）塩をあてて冷蔵庫に一晚ねかせます。玉ネギの細切り、パセリのみじん切りを加え、酢油ソースの塩の入らないものに漬け込みます。レモンを少々薄切りにして飾る。

これにハムやトリの冷肉、トマトやきゅうり、セロリなどとり合せマヨネーズで。デザートはマルティニツク風バナナ

マルティニツク風バナナ

バナナを皮をむいてタテ二つ割りにし、サラダ油を流したフライパンに並べて、よく焼きます。一度ひっくり返すこと。焼けたところで砂糖を好みでかけ、砂糖がとけたら火を止めます。ウイスキー、ブランデー、ぶどう酒、リキュールなど、どれかを少々ふりかけて冷蔵庫に入れてひやします。

主食はパンでもごはんでも。

第一回

「わいふの集い」

をもちました。

四月二十七日、第一回の「わいふの集い」が神楽坂の東京都の教育会館で開かれた。

出席者、十九名。はるばる山梨県から出席されたかたもある。

五十代から二十代にわたる、年令も、生活環境もさまざまな主婦のあつまりであったこと、今回はとくにテーマをもうけて話し合う会ではなかったことなどから、まとまりに欠けたうらみはあったが、はじめての顔合わせとして、ナマの声を出しあい、相互の親しみをふかめた点で、やはり意味のある集まりだったと云えるだろう。

自己紹介からはじまって、「わいふ」の今後に何を期待するか、が語られた声の中から、代表的なものとして、甲府市の風間ゆりさんが、地元の特産者のかたがたの声をまとめられたメモをご紹介しよう。いささか、好意的すぎるご批評で、編集部としては、面映ゆくもあるが。

「わいふ」地元で好感を持たれています。

今までの婦人雑誌にない清潔さと新鮮さがある。

編集の素人ぼさがよい。

反対意見をちゃんと取上げている。

自分たちの思う方向に引張ろうとか、押しつけてこないのがよい。

少しでもものを考える人たちにとって、たいへんよい問題を提起してくれている。

へんに気取ったり、インテリぶったりしてないのがよい。

・今後にはのぞむこと

編集の技術にあまり拘わらず、親しみのあるものにしてもらいたい。

洗練されるのはよいことではあるが、あまり洗練されすぎて都会的にならぬように願います。適宜な泥くささを残しておいてほしい。

女の生きさまのしたたかさ——と云ったものを出してください。

面白くよめる雑誌であることが第一。

これに對して、何といっても一定の経費のかかる雑誌として、ある程度の部数売りあげなくてはならないのだから、雑誌として洗練されるのはよいことなのではないか、など、齒に衣させない意見の交換が行なわれた。

今後はテーマをきめ、もうすこしまとまりのあるものとして継続していきたいということである五時近く閉会した。

集いの感想

東京都

吉羽芳子

今日はありがとうございました。仕事をやりくりして行っただけのことはありました。ただ、全般的に大げさで枝葉のことが多いような気がします。あの中の何人かだけの方となら、もっと話してみたいでした。聞くばかりで何も発言しなかったのは、言っても真のところをわかってもらえない、もどかしくあとで空しくなると感じたからでした。でも初めてだったから仕方がなかったのかも。そのうち気心を知れば私もすなおにはんとうのところを聞いて欲しい、またそれに対する反撥や意見も受けたいと願うようになるかも知れません。

○主人に遠慮、どうして？

夫婦は一心同体、と、それとは少しニュアンスがちがいますが、私は夫婦は精神も肉体もお互いからだの一部だと常々感じています。主人にとって私は、生きがいであり、なくてはならない存在だとはっきり言い切れます。もちろん私にとっての主人も同じふうに言えます。性格や考えがちがっても何卒になっても、相手を心から思いやり、信頼しあい、決して裏切らない、

努力しあう、そして自分自身がいつもしっかり前に向かって歩いていたら、時間にしろお金にしろ（それが勉強でなく遊びに使われても）どうして遠慮をすることがあるのでしょうか？

半分は妻のものととか、これだけつくしたからこれだけ使っていきたいというような、そんな悲しいものではないと思っています。確かに遠慮する、ゆかしい気持ちも理解できますが、ご主人のことをほんとうによく知り大切に思えば、そんな気持ちは逆になくなるのではないかと、思いながら聞いていました。

○お金で買えないもの

（ある方の発言より気にかかること）
昨年から野菜作りをしています。土の香りが育っていく過程、「人間に戻ったみたいだね。」二人ではしゃいで楽しんで作っています。土地の借り賃や肥料代を考えたら、買った方がずっと安いけれど、お金で買えない「いいもの」がそこにあるのです。

ネコにいいお魚を毎日食べさせます。せいたくだとマユをひそめる人もいますでしょう。けどネコがおいしそうに満足そうに食べているのを眺めていると心が暖かくなります。

日常生活の中の小さいことで、お金で買えない感覚や感動を見つけて、それらを大切にすることを私は忘れないでいたいと思います。

○編集のみなさまのこと

私は人の好ききらいが激しく、性格もきつい



のですが、今日じっと見ていて、編集の方をみんな大好きだ、と感じました。話せばわかってもらえる人種（悪い言葉ですみません）だと、求めている友だちができると思いました。年令は少し上のようなけれど、甘えないでぶつかっていきけるような気がして、この会から離れないでくっついて行きたいと思いました。恵まれて育ってしまっ、ちぐはぐな面はたくさんありますが、まだまだ柔らかいので成長はできると思っています。よろしくお願いします。

子供のいない女が、時たま叫びたいほど悲しいことのあること、産まなくても母性もあること、立派な女の一人だと言いたい気持ち等、いつか話してみたいと思っています。

ひとこと

甲府市

風間ゆり

「わいふ」の読者会の感想を申し上げます。すぐれた方にお目にかかれて、大変嬉しく存じました。

でも、女性の集まりには、まとまりがつきにくいということが、とてもよく解りました。楽しいだけでも意義がありますが、切角の集まりですから、訓練の場にしたら？と思います。テーマをきめて、少なくとも、つかず離れずで全体が進行できるようにしたら……と思います。先日のが、テーマがなかったというわけでもなく（話のなかには一貫性が十分ありましたが）ばらばらだったというのでもありませんが、もっと司会がしめてもよかったんじゃないでしょうか？

生意気なことを申し上げてすみません。本当は、司会者の問題じゃなくて、一人ひとりの自覚だと思うのですけれど……。

それから、私は、年令というものを、とても考えさせられました。（中略）そんなことを考えさせられるのも年のせいかと思ったり。先日の会合ではとくに。そのことを感じました。若い人のピリッとした意見を聞いたせいでしょ



おひやべり

皆さんの声のひろばで
す。感想・提言どうぞ
何でもお寄せ下さい。

桜の花もすみ四国、松山では藤の花が今を盛りと咲きはこっています。

私はわいふ15号から大切に保存しています。長いだけで、読むだけの会員で恥かしく思います。一三九号で（わいふの集い）のお知らせをよみ、とても懐しく思いました。

飯田橋、神楽坂、地名が特に懐しくてペンをとりました。神楽坂で京染の店をしておりましたおばの家へ、昭和十八、十九年と私は手伝いに行っており、当時は物資の不自由な時代なので、千葉あたりまで「おいも」の買い出しに毎

日のように出かけました。

今、想い出すと本当に楽しかったと思います。あれきり東京は行っておりません。

何時の日か出かけることもあろうかと皆様にお目にかかれる日を楽しみにしております。

愛媛県 長栄豊子

本日「わいふ」一三九号、あごらで買いました。前号とも表紙がガラッと変わった感じですね。内容も充実していますね。

ただし未婚の友人にみせたら、「いいけど、結婚したくなっちゃう雑誌だね」という言。あごらをみせたら、どうも歯がたないというおばさんに一冊あげてみようと思っています。

東京都 萩原洋子

桜の花も散りかけました。

御無沙汰致しております。御元気でござしの事と存じます。

先日「わいふ」受けとりました。

ほんとに内容の豊富なわいふ、すばらしく思いました。従来のもとは異った、又味わい深い

ものです。でもあれだけ立派なものを三〇〇円で、と思うと皆さんの奉仕精神に頭のさがる思いです。ほんとに御苦労様です。

毎日新聞のおかげで七十名会員が増えたとの事ですが、黒字を出すための千人はまだまだでしょうね。他の新聞もとりにあげてくれるとよいです。今、三人ほどにすすめています。

日本の夫について提出するつもりでしたが、学童保育所作り運動に奔走していたので、つい出しそびれてしまいました。

「となりの芝生」の夫は、うちの夫を見ているようでした。夫に「あなた、これ見えていくすぐたいでしょう。」という、ニタリと笑うだけでした。もっといろいろ書きたい、と思ったけど、いずれまた。

編集にあたられた皆様によくお伝えくださいます。

兵庫県 小川倍恵

二月初めに「わいふ」のことを新聞紙上で知りました。

平子さん（前号、おしゃべり欄）同様、「これだ!!」と思ひ購読申し込みしてから、実際に「わいふ」を手にするまで待ち遅かったこ

と。やっと届いた“わいふ”は一気に読みたくさりとて又、一気に読んでしまうのは惜しく、結局三日がかりですみからすみまで読ませていただきました。

“わいふ”につきましては、ただ多くの主婦がおのおの書きたいことを書いてそれが本の体裁をとっていると、至って単純に考えておりました。本の形をとるためにはそれなりのスタッフがいるはずと理解はしていましたが、“わいふ”を初めて読んでみて、立派な編集部が存在することに驚き、いささか遠のいた気がいたしました。

毎号テーマがあるらしいことも、大庭みな子さんのお名前にも驚きました。そして一番「私のひとこと」欄に驚きました。こういう風にはっきりと製作側の意見と読者側の意見が並べられているとは思ってもおりませんでした。

私が「これだ!」と思った時、何を期待していたかと申しますと“わいふ”こそ、家庭に引きこもった私を外に出してくれるものだという事です。それは抽象的な意味の他に、具体的に私も私みずから本づくりに参加させていただけではないかという望みでした。

“わいふ”が東京で発行され、私自身、東京住いであるということ、それから中学、高校時代のクラブ活動のようなものを考えておりましてために、そうしたのぞみを持ってしまったのです。

今、わいふは私が考えておりましたよりも、大がかりな刊行物であることを知りました。

でも幸い、投稿は原則として、すべてのせていただけるということですので、これにすがって、心を広く外に向けてたてとして、“わいふ”のお仲間に入れていたきたいと思えます。勝手なことを申し述べましたが、どうかよろしくお願いいたします。 東京都 北村七重

一三九号ありがとうございました。私にははじめての“わいふ”です。

久しぶりに西宮市の実家へ帰るため玄關の鍵をかけているところへ配達されました。新幹線に乗っている間ずっと読ませていただきました。上巻様の「父」、胸にしました。そのほか編集のみなさまのご苦労や、いろんな方々の考え方や心の中など、ひとつひとつが、とてもよくわかるような気がいたしました。

さて、私三十六、主人三十九、結婚十四年目。子供はいません。

女の人の大切な仕事「育児」の分だけは、ほかの何かで補いたいいつも思っています。

子供の将来とかマイホーム建設とか、はっきりにした夢は持っていません。ただ「明日死んでもくやしなくないように。」と夢というのか目標というのか、そういった気持ちには、いつも痛切に感じていて、それを忘れないようにして暮ら

しています。けどしょっちゅう小さいことにつまずいたり、ずっこけたり、もつれたりしています。そんな時、主人がまるで母親のようにかばってくれたり、見守ってくれたり、逆に、私が力になってあげることもあります。助けあっていつのまにか少しずつ大人になってきたようです。

私は和文タイプの仕事をしています。小学生の文集や会報・研究物ばかりです。この仕事を通して子どもたちをやさしい目で見られるようになりました。でも、男の子も女の子も人間の子どもとして、一般的にしか見られません。

その上、人の子どもも、ネコも花も、同じようにいとおしい生き物として感じたり、見つめたりすることがあるのです。子どもを生んでいれば、人の子どもをも、もっとちがったふうに見ることができるようと思うと、やはり少しさみしいような気がします。

週のうち五日は一日中タイプの仕事をしています。主人が出た後、おふとんを干して、そうじをして、あとはずっと仕事です。忙しいけれど好きな仕事です。大体私には家事とか趣味とか仕事とか、区別がないのです。全部が生活です。

大そうじが大好きだし、草花もいっぱい植えて、野菜も作ります。

ネコと遊ぶし、本も割に読むほうです。気が向けば毎日お菓子も作ります。レースも編みま

す。

郷ひろみがテレビにうつれば熱心に観たりもします。片づけをしながら作ったメロディーをピアノに並べてうたを作ってみたりもします。

時々友だちがやってきて「優雅ねー。」とあきたように言います。「そうかなあ？ 真剣なんだよ、これでも一生けんめいなんだよ。」と言えない時は心の中で思っています。

とにかく暇なく何かをしています。

ひどい貧乏ではないけれど、貯金は増えないし、特別に豪華な暮らしもできません。人さまのことを羨ましいと思ったり、小さい不満がないでもないのです。ただ大きな悲しみや辛いこともなく、おおむね楽しい日々なのです。今でもまだ主人は恋人みたいですし、これが「幸せ」というものだろうと今書きながらそう思います。

先日、ご近所の小さい子どもさんに「おばさんはかわいいから大好き。」とケロリと言われて少しショックでした。でも、すなおにその言葉を受けることにしました。年のわりに幼稚なところが残っているようだし、子どもを育てていないので、やはりふつうよりはわがままだろうとも思います。また精神的にかたよった部分もあると思います。が、きれいなところもまだたくさんあるらしいのです。

“わいふ”を毎号読ませていただいて、少しずつ成長していくことができたらいなと思

ます。

かたひじ張らない程度に、いつもしっかり生きていたいと、そんな気持ちをはるかに持っているのです。

初めての手紙なので、思いつくまま正直に書きました。最近では電話で何事も済ませて、ほとんど何も書きません。今読み返してみれば、ずい分へんな文章でいやになりましたが、このまま投函します。

“わいふ”の代金、おそくなって申しわけございません。今朝二、〇〇〇円ふりこみました。（倍でも、三倍でもいいと思います。今のままの額ではたいへんだらうと、私も思います。一応一年分ですが、いつでも追加を送りたいと思います。）

次の発行を楽しみにしています。それぞれにご家庭やお仕事をお持ちの上になさってください。お仕事ですもの、編集のみなさまには、ほんとうにお骨折りのことと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

東京都 吉羽芳子

皆さんの声が、増幅されて、からだの中で鐘のように鳴りひびくように思われる日があります。忘れていたもののなつかしさ、新しいものの発見の喜びに浸る日があります。

編集者の冥利でしょうか。ハガキ一枚でけっこうなのです。お待ちしています。（田中）

過日は富永様を通じて“わいふ”一三八号を送りいただきながら、丁度年度末の採点や図書関係の雑用に追われていて、たいへん失礼いたしました。

またこのほど、一三九号をお送りくださり早速読ませていただきました。

気負いのない新しさ、心から拍手をおくりたいと思います。一四〇号に一篇まとめてみましたが、これからはますますよい雑誌に育っていきますよう編集部の皆様ががんばってください。

先は御礼まで 東京都 馬場淑子

新聞で“わいふ”のことを知り、大変楽しみにしておりましたが、はじめて手にした一三九号なかなか面白く読ませていただきました。

私の期待通り、市販されている雑誌とは違って、それぞれの体験に基づいた生の声を聞くことができ、マス・プロ社会の中でとくなくおざりにされがちな一人一人の人間が大事にされているこの雑誌はたいへん貴重だと思います。なんだか同じようなことを考えている仲間ができたような気がして、とても心強く思いました。

これからもそれぞれの生活体験から出た生きた言葉、本音を出し合って皆様と一緒“生きる”ということを実践に考えてゆきたいと思っています。

名古屋 市 中西淳子

主婦のための投稿誌

「わいふ」へ

あなたもどうぞ！

投稿規定

予約購読者はどなたでも投稿できます。

投稿は原則としてすべて掲載します。

(一) 随筆、随想

テーマ自由、二千字まで

テーマ原稿 二千字まで

(二) おしゃべりコーナー

おたより、わいふへの注文など。

ハガキ一枚から千字程度

(四) 持込み原稿

形式、内容、長さ自由

問題提起、文芸作品、評論など。

ただし掲載は編集部が協議の上、決定致します。

一四二号テーマ原稿募集

「日本のおばあさん」

六十五才以上の女性の自殺率が世界一。それが日本です。そのくせ、和かな、やさしい表情のおばあさんもたくさんいる日本です。

日本のおばあさんは、いったい幸せなのか、不幸せなのか、不幸せなのでしょう。みじめなおばあさんと、魅力的なおばあさんの暮らしは、どこが違う、違うのでしょうか。

あなたの身近かにいらっしゃるおばあさんの姿を、描いていただけませんか。こんなおばあさんにだけはなりたくない！ というかたも、こんなすばらしいおばあさんがいる！ とおっしゃるかたも。

もちろん、私はこんなおばあさんです、という自己紹介でもよろしいのです。締切りは七月二十五日です。長さ二千字まで。

編集後記

▼「へえーデザートまで作るの」「これじゃ役割分担じゃないの」と和田さんの留守宅料理の原稿を前にカンカンガクガク。留守の時はいつもよりご馳走をという和田さん。留守の時ぐらいい簡単にしたらという林さん。たった一つの留守宅料理をめくっても、意見はさまざまです。

▼「わいふの集い」を継続的に持つべきかどうか、編集部で煮つめた結果、年二回ぐらいが適当ではないかということになりました。今後の会の運営やテーマについてご希望をお寄せください。

▼今回は割りつけのとき、田中さんは仕事で、林さんは旅行で、肝心の二人が脱けて四苦八苦……日頃遠いことを口実に二人に任せていたタタリかとばやくことしきり。

▼亀山利子さん、高校の先生を続けられるかたわら、アフガニスタンの女性史の執筆で殺人的多忙となり、編集から脱けられました。ご寄稿を期待しています。(荒木)

〈わいふ〉 140号 1976年5月25日発行 定価 300円・年間予約 1500円・送料 720円

発行所・わいふ編集部 東京都新宿区加賀町2-3 田中喜美子方・TEL 260-5500・269-2388

編集・荒木弘子・田中喜美子・林 慶子・宮城道子・和田好子

印刷所・東京都新宿区岩戸町10 チトセ印刷 ★振替注文は東京5-110430 わいふ編集部へ



定価 300円